

4. 総合科学部 50 周年によせて
—39 人のエッセイ—

本章は、この 20 年間の広島大学総合科学部や大学院総合科学研究科（2019 年度より一部は統合生命科学部研究科に、その他は 2020 年度より人間社会科学部研究科および先進理工系科学研究科に再編）を活動の場としてきた 39 名の方々（同窓会員・卒業生、教員、職員、大学院生、学部生）によるそれぞれの思いを綴ったエッセイ集である。本誌編集部から、以下のカテゴリーに当てはまる方々に執筆をお願いした。それぞれのカテゴリーについて、あるいはそれにかかわらず総合科学部やそこでのご自身の活動の日々について、自由に執筆して頂いた。以下、執筆者名を掲載順に記す。

- | | |
|---|--|
| ・同窓会員として | 前延国治氏、奥原啓輔氏 |
| ・学部教務委員長（教育領域委員長）経験者として | 吉村慎太郎氏、船瀬広三氏、青木利夫氏 |
| ・学部入試委員長経験者として | 久我ゆかり氏、平手友彦氏、石坂智氏、石田敦彦氏 |
| ・広島大学出身で長く総合科学部に勤務した教員として | 水羽信男氏、荻田典男氏、丸田孝志氏 |
| ・長く総合科学部に勤務した教員として | 山崎岳氏、中坪孝之氏、浅野敏久氏、辻学氏、桑島秀樹氏 |
| ・外国人教員として | 張慶在氏 |
| ・副学長表彰者として | 神田実鈴氏 |
| ・岡本賞受賞者として | 安達（寺田）未来氏、竹内音寧氏、片山春菜氏、菱川慶人氏 |
| ・総合科学部支援室職員として | 松岡（上脇）葉子氏、鳥山剛氏 |
| ・総合科学研究科所属の大学院生として | Elahe Nassr 氏、小松正幸氏 |
| ・学部授業「総合科学概論」論文賞を獲得し、2 年以上在籍している大学院生・学部生として | 山本昌奈実氏、牧野桃子氏、中森柚子氏、草野櫻子氏、細國空氏、松元祐希恵氏、前平紬希氏、奥田弥陽乃氏、平原和哉氏、廉明德氏 |
| ・2023 年広島 G7 サミット学生通訳ボランティアとして | 江田陽哉 (Haruya Eda) 氏、中村龍之介 (Ryunosuke Nakamura) 氏 |

次ページ以降は上記の各執筆者によるエッセイである。

(50 周年記念誌編集部)

総科とは 原点を顧みて ～求め続けた「総科生」～

第7代同窓会長
前延 国治

(上) 今のキャンパス、(下) 昔のキャンパス



志望の時は可能性を感じて

自分の将来を描き切れなかった日々、何気なく読んでいて目に飛び込んできたのが「総合科学部」で、目新しい分野を備えた4つのコースが用意され、入学後に選択できるとの記載があり、これなら、まずは色々と聴いてみて、専攻を固めることができると志望したのが、昨日のように思い出されます。

しかし、実際に学生生活が始まると、自分の専攻、将来をどうするかよりも、開放感に浸って、同じ悩みを抱える同期と地下1階にある専用部屋でダベリ合い、試験対策に明け暮れ、互いの下宿に集まっては語り合い、夢や将来、今の悩みなど、一気に青春を謳歌したものでした。

特にオリエンテーションキャンプの仲間とは定期的に集まりながら、交換ノートを通じて互いの近況や思いを分かち合いつつ、先輩であるフェローからのアドバイスをいただきながら、楽しい学生生活を送らせてもらいました。

自分達で何かしら企画してやってみる、失敗もするけど、その経験は必ず次の機会には生きてくるし、他の分野でのチャレンジにも活かされたと思います。

私自身も、次年度にフェローとして後輩のお世

話をさせていただいて、大変だったけど、楽しかったことを思い出します。

社会では中途半端と言われて その反骨から

でも、社会で働き始めた時、総合科学部の説明には苦勞したものです。何が専門かと問われ、自分に自信のある分野を説明しつつ、学部のことを説明しても、専門が無いのではと言われるのが悔しくて、ならば一通りのことはできる事を証明してやろうと、仕事はきっちりやってみせることを常としてきました。

世に言う専門家も、何かの課題解決に取り組む際には、関連する学問に加えて、これまでの様々な知見や現実、社会的背景など総合的に把握しているからこそ、アドバイスを求められるのであり、その際には、その人の取り組んだ実績も求められます。

私自身のキャリア形成は、与えられた課題によるものもありますが、総科生ならではの多面的な着想で具現化すること、成果の形を見せる努力を積み重ねたことによるものが大きかったのではと、今更ながら思います。

専門家って何 誰が決めるもの

私だけかも知れませんが、ただ、仕事としてこなすだけではなく、自身が担当する意味を見いだす為、何かしら、関わったことの成果や価値を残したくなります。

その積み重ね、いわゆる実績とその取組みにおける理論的知見が、その分野における専門家と呼ばれる所以ではないでしょうか。

江戸時代後期に米沢藩藩主の上杉鷹山が師と仰いだ細井平洲の言葉に「学問の目的は実践のこの二文字でございます。」とあります。

この学問は実学であるべきという言葉は、社会の課題解決に立ち向かう「総合科学の創学の志」とも軌を一にしていると思います。

自身の求める姿を探し求めて

誰しも、能力の分野やその力量には違いがあります。でも、それをどう社会的課題に適應させるか、まさにその点はその人の可能性であり、その適應力を高める学問が「総科」ではないかと思えます。自身の学びたい新たな分野に、既存の学問領域を組み合わせながら、アプローチを自ら仕掛けていく。このことが、その適應力を高める訓練にもなるし、「総合知」の獲得にもつながるものと思えます。

世の中に認めてもらうには、活動実績やその価値を正しく理解して伝える力量が求められます。その為にも、目的を持って、チャレンジし、その成果を自身で分析、更にチャレンジしていく姿が求められると思います。

世代を超えて

何が大切なのか、正解なのか、いつも自問しますが、それが解らないから面白いとも思います。その時は正しいと思って、時代の要請や世の中の動きの中で価値観も変わるし、常識も変わりますが、あるべき姿勢だけは変わらないと思います。

何をしたいかではなく、何を、どこを目指しているかを大切にしていきたいと思います。皆さんはいかがですか。

「ひろだいそうかは せかいにひとつ」

プラチナバイオ株式会社 代表取締役 CEO
奥原 啓輔



「せかいにひとつ」の学部

「ひろだいそうかは せかいにひとつ」。総合科学部の正面玄関前にある石碑に刻まれている言葉です。

学生時代、何気なく眺めていましたが、社会人になって振り返ると、文系・理系を問わず本当に色々な研究分野が混在する、「せかいにひとつ」の学部だったと思います。

学生時代の私は、脳科学の研究者になりたいという思いから、部活に明け暮れた高校時代から一転して勉学に励む日々を過ごしていました。そのため、色々な志向性・多様な価値観を持つ同級生と十分に交流する機会を持っておらず、とても勿体ない学生時代だったなあと回顧しています。

もし自分の子どもが「ひろだいそうか」に進学

することがあれば、知らない土地への留学や、自らの価値観をぶっ壊すような経験、人々との出会いを最大限楽しんでほしいなあ、と思います。とはいえ、私自身は、今の人生に十分満足しているので、何が正解かはわからないのですが。

挫折から始まる、新たなキャリア

卒業後の私のキャリアは、研究者を目指すも挫折し、研究を支援する科学技術振興機構 (JST) に入庁したところから始まりました。そこで、産学連携の部署に配属され、大学の研究者が企業と一緒に応募するプロジェクトの企画・運営に携わりました。その後、内閣官房知的財産戦略推進事務局に派遣され、国の知財戦略の策定に関わりました。その中で、大学の研究成果を知財化して企業へ橋渡しすること、事業戦略と一体となる知財戦略の重要性を学びました。その後、東広島市を経て、広島大学の産学・地域連携センターに着任した際、ゲノム編集研究のトップランナーである山本卓教授と出会い、古巣である JST が新規公募を開始した「産学共創プラットフォーム共同研究推進プログラム (OPERA)」への提案を担当したことが、すべての始まりでした。

OPERA に採択された後、広島大学を中心にオールジャパンの産学共創を推進した結果、研究成果の社会実装に向けた取組みが加速され、スタートアップ設立への期待が高まりました。私は元々「アカデミアの研究シーズと企業のビジネス課題のギャップを埋める役割」の必要性を感じており、文部科学省 EDGE プログラム、JST 社会還元加速プログラム (SCORE) を経て、起業することを決意し、2019 年 8 月にプラチナバイオ株式会社 (PtB) を共同創業するに至りました。これは、トップ研究者と産学連携担当者が共同創業した、全国的にも珍しい事例になります。

創業時に直面した経営課題は、ビジネスに必須となる法務・知財・資本政策などに精通する、高度専門人材の確保でした。広島地方都市だけではなかなか出会えない状況でしたが、東京で開催される起業家支援プログラムや、広島大学の卒業生のネットワークを駆使して、各分野のトップクラスの専門人材から協力を得ることができました。

PtB は、生物がもつ遺伝情報を解釈・解析する“生物のデジタル化”と、ゲノム編集による“生物のプログラミング”を組合せて生物機能をデザインする「バイオ DX」のコンセプトを提唱し、OPERA 後継プロジェクトである JST 共創の場形成支援

プログラム (COI-NEXT) や、内閣府の地域バイオコミュニティに認定された「ひろしまバイオ DX コミュニティ」において、中心的な役割を担っています。

PtB は、大企業・病院とも連携して、広島大学



の研究成果であるアレルギー低減卵の社会実装を進めており、「食のユニバーサル化」の実現を目指しています。その他、難病治療のための先端医療、水産資源の安定的・持続的な確保、資源循環型農業、カーボンリサイクル、バイオものづくりにも取り組んでいます。

人材の宝庫、「ひろだいそうか」

色々な組織での業務経験を通じて痛感することは、どんな仕事も、その根幹は人材である、ということです。社内には、会計、人事労務、広報、事業推進、研究開発を担う人材が必要ですし、社外にも、弁護士、弁理士、公認会計士、税理士、社労士、証券会社、銀行、商社、戦略コンサルタント、アナリスト、マーケター、デザイナー等、幅広い業種から専門人材の協力を得ることになります。

「ひろだいそうか」の卒業生に目を向けると、まさに人材の宝庫です。卒業後、それぞれのキャリアを歩んでいく先で、様々な分野で活躍する卒業生の人材ネットワークは、必ず役に立つものになるでしょう。皆さんも文系・理系を問わず、同窓生の繋がりを大切に、ネットワーク広げて頂ければと思います。

最後に、本寄稿のご推薦をいただいた小川景子先生（総科 09 同級生）に、厚く御礼申しあげます。「ひろだいそうか」に関わるすべての方々が、それぞれの道でご活躍されますことを心より祈念しております。ご高覧いただきありがとうございます。ありがとうございました。

総合科学部との「縁」から学ぶ

広島大学大学院総合科学研究科・総合科学部
名誉教授 吉村 慎太郎

私が総合科学部（以下、「総科」）に赴任したのは、1988 年 10 月です。2021 年 3 月末日をもって 65 歳で退職しましたから、それまでの人生の半分を総科と共に過ごしたということになります。

着任当時の手狭なプレハブ研究室住まい、泥道に足を取られながらの東広島キャンパスへの移転作業、教養（英語を含む）や専門の多くの授業の準備に明け暮れながら、土日に行った静かな研究室での論文作成、宛て職的な改革ワーキングや各種委員会参加、総科だけでなく広大がもっと誇らしく感じるべき『大学新生に薦める 101 冊の本』（旧版・新版）プロジェクトの企画編集、楽しく有意義な、しかし時に苦々しい意見対立、懇意にしていた同僚との早過ぎる別れなど。それこそ、喜怒哀楽に満ちた 32 年半でした。

創立 50 周年ということですから、暗い話はできるだけ控えますが、赴任から最初の 10 年以上は正直、総科は教員スタッフの専門ばかりが前面に出過ぎた「寄合い所帯」（表現が不適切であれば、お叱りは甘受します）であったように思います。それ故、「ミニ…学部」とか、「看板倒れ」といった外部からの批判も強ちの外れではなかったのではないのでしょうか（?）。居心地は良かったものの、総科内のコース（その後プログラム）は半独立的で、その中の群や講座も強い影響力を持っていました。

そうした背景のひとつに、教養と学部専門、さらに大学院という「三足の草鞋」の仕事量の多さが総科構成員を疲弊させ、その結果自らの専門に依拠しながら教育研究を行い、精神的、時間的な余裕を作らざるを得ない事情があったように思います。試行錯誤を重ねつつも、今堀誠二先生（初代学部長）や歴代執行部の諸先生が熱く語った総合科学の理念実現は後回しされたように思うのです。

2011 年前後の 2 年ほど、教養の授業担当について協力依頼するため、於保幸正先生（教養教育副本部長）にくっ付いて各学部に出向いたりしました。他学部教員の中には、「自分たちの貴重なポストや予算を総科に譲り渡し、教養教育を担当させている」との発想で、わずかでも問題があれば、鬼の首を取ったように総科を非難する教員もい

ました。イライラする私と違い、そうした批判をやんわりかわし、協力の依頼を続ける温厚な於保先生のご苦勞には頭が下がる思いでした。これも、教養の主たる責任部局としての総科の一面です。

厳しい学内の教育研究環境に置かれながら、総科は理念実現に向けて着実に前進してきました。佐藤正樹学部長時代の2006年、念願の大学院総合科学研究科が創設されました。2013年には専門の垣根を温存しがちな複数コース制・プログラム制を廃し、学際的な総合科学を学びたいとの学生の要望に真摯に耳を傾けた単一プログラム制の下で、人間・自然・社会という「探究領域」を設け、各領域に4つの授業科目群を配置する大改革を行いました。

その改革ワーキングには文系理系の諸分野を代表する形で5名前後の教員と事務系職員が参加し、私もどういう訳か、そこに加わりました。時に土日返上で朝から議論を重ね、練り上げた改革案を拡大ワーキングにかけて詳細を詰めました。仕組みや名称をめぐり、気心の知れた先生と一触即発の意見対立に陥ったことも少なくありませんでした。

吉田光演先生(2024年4月にご逝去)率いる執行部の中であって、2012年から教養教育カリキュラム副部門長として研究科長補佐を、その後2014年から副学部長としてそれぞれ2年間、貴重な経験となる機会を頂戴しました。また、総科との「縁」があったればこそ、核拡散、女性差別、環境破壊など、自身が21世紀的な課題とみなすテーマについても取り組みました。本当に有難うございました。

すでに教育現場を退いた私には、日々変化する課題解消のために助言めいたことは言えませんが、以下のような秘かな願望は持っています。

- ・総科専門に連動する高度教養教育の一層の精査
- ・アウトソーシングに依らない「総合科学へのいざない」と「総合科学概論」の内容の再検討
- ・新たな「タコツボ化」を防ぎ、探究領域や授業科目群の複合的な一体性を担保する仕組みの構築

私の総科との「縁」だけでなく、総科創設とその後の変革、さらに総合科学という学問の必要性も様々な条件や要因に突き動かされた結果です。「縁は異なるもの味なもの」と言うのでしょうか。

「天命を知る」年齢に達した総科の構成員の皆さんには、この「縁」を大切に、総科理念の実現

に向けて一層の奮闘を期待しています。最後に、吉田光演先生のご冥福を心よりお祈り致します。

副学部長時代の思い出

広島大学大学院総合科学研究科・総合科学部
名誉教授 船瀬 広三

私は大学院総合科学研究科が設置された2006年4月に長崎大学医学部保健学科から総合科学部(総科)に赴任しました。前任地は将来の看護師、理学療法士、作業療法士など、医療専門職の養成を目的とした教育研究機関であり、「生理機能学」、「生理機能学実習」等を担当していました。当然ながら、学生は明確な将来の職業像を持っており、上級生になると医療現場での臨床実習を経験するので、礼儀正しく社会的に成熟した学生が多い印象でした。一方、総科は全国の大学に先駆けて時代を先取りした“文理融合”の理念の下に設置された学部です。その方向性が的を射ていたことは、その後、多くの大学で類似の理念を掲げる学部が設置されたことでも証明されていると思います。赴任当時は10教育プログラム制で私はスポーツ科学プログラムに所属でした。2013年には現行の1教育プログラム制に移行し、人間探究領域スポーツ科学授業科目群に所属しました。在籍期間17年で卒論ゼミ生21名、修士10名、博士5名を送り出し、2023年度をもって定年退職しました。

総科赴任後10年目の2016年4月から2期4年間、副学部長(学部教育担当)兼副研究科長の任に付きました。予てから30~40歳代は自身の研究に専念し、50歳代では人材を育成し、60歳代は所属部局に恩返しをするという考えを持っていましたので、執行部入りの打診を受諾しました。前任地のような専門職養成を目的としない学部ではよくあることだと思いますが、総科の新入生も少なからず明確な将来像を持たない学生がある程度の割合で入学します。総科での様々な経験を通して自らの進むべき道を探すことは素晴らしいことですし、それが叶うようにカリキュラムも設計されています。教育担当副学部長として、1年生前期に“総合科学へのいざない”という授業を担当しました。シラバスの目標には“細分化した学問的現状、総合科学部の歩み、総合科学への期待と課題を理解し、総合科学的発想のもとで、問題の発見と解決に向けた探究の姿勢を学ぶ。”と記載されています。研究科長、私を含む3名の

副研究科長、各領域長、外部講師等がそれぞれの立場から、総科の理念に関わる自身の経験や研究紹介、各領域授業科目群の紹介、具体的な学生の研究等について紹介したりします。その中である教員による印象深い話がありました。要約すると、“総科に興味の対象を見つけ、文理を問わず周辺分野を含めて勉強すれば、将来に繋がる充実した学生生活になる。一方で、広く浅く脈絡なく履修要件を満たすだけだと卒業時には単なるバカになる。”という総科カリキュラムの長所と短所を端的に示した内容でした。これを聞いた1年生は総科生としての自覚を強くしたのではないかと思います。実際、私の研究室でもこの話を裏付ける体験をしています。興味を持てる研究対象に出会うと、その周辺分野も含めて研究史を調べ、実験結果を発表し、評価されることを経験して自信を付けると、そこから先は、目を見張るように成長していきます。私が経験したこの事例は、研究活動に関するものですが、就職して実社会の各分野で活躍している総科卒業生にも、同様に当てはまることではないかと思います。このように、文理融合を盛り込んだ総科の履修カリキュラムについてはある程度の成果をあげていると思います。教員間でも、実際に互いの専門知識や実験技術を持ち寄って研究を進めている事例も見られ、今後の発展が大いに期待されます。

副学部長を務めた4年間は39年に及ぶ私の大学教員生活の中でも様々な事案に向き合った貴重な体験でした。今後は総科学生・教職員の皆様のご健闘をそっと応援していきたいと思っています。

新たな総科の姿を求めて

広島大学大学院人間社会科学研究科・総合科学部
教授 青木 利夫

わたしが広島大学総合科学部に着任したのは、1998年4月1日でした。総科50年の歴史のなかで、その半分と少しの年月を過ごしたことになります。当初の配属先は人間文化コースでしたが、その後の再編のなかで「人間文化」から「地域文化」へと移り、現在は社会探究領域の配属となっています。「地域文化」という名称は時代によってやや変化し、現在では社会探究領域の地域研究授業科目群として引き継がれています。名称の変遷があったのは本誌をみればわかるように、学部内でコースやプログラムの再編が繰り返されてき

たという背景があります。

学部にとっての最大の組織再編は、大学院総合科学研究科の設置（全学の大学院再編のなかで2020年に3つの研究科に分かれる）とその後の国際共創学科の開設でした。わたし自身は、こうした度重なる改革のなかで重要な役目を担うことはありませんでしたが、そのなかで感じていたことは、「総合科学」あるいは「総合科学部」とは何かという問題を学部全体がつねに問い続けてきたということです。わたしの専門はメキシコ近現代史研究で、広島大学に赴任するまでは「総合科学」などということは考えたこともありませんでした。おそらく、多くの（ほとんどの？）教員も同じではないかと想像します。しかし、学部の再編、大学院の設置、再編と続くなかで、多くの教員が「総合科学部」とはどのような学部であり、どのような教育プログラムを学生に提供すべきか、そのなかで自分の研究の方向性をどうすべきかということをつねに考えてきたのではないのでしょうか。とくに広島大学において伝統のある文学部、理学部、教育学部、そして工学部など他学部とどのように差別化を図るのか、広島大学において総合科学部の特徴をどのように打ち出すのか、そもそも総科の理念である「文理融合」とはどういうことかといった課題を総科はかかえてきたように思います。

こうした総科の難しさは、教員だけではなく学生にも同様に感じられていたようです。わたしは、2020年度から2023年度まで、総合科学科長として1年生の専門科目である「総合科学へのいざない」と「総合科学概論」という授業を担当しました。この授業では、総科に入学したばかりの学生に、「総合科学」とは何か、総合科学部でどのような学びをするのかということそれぞれが考えるということを授業の目的としていました。大学で学ぶことを決めている一部の学生を除き、何を専門的に学ぶか明確な目標もなく、いろいろなことを広く学ぶことのできる総科をとりあえず選んだという学生が少なからず入学してきました。

もちろん、日本の学校教育の現状や就職状況を考えると、そのような学生が多くいることは当然のことであり、わたしとしては総科の学生たちに自分の特性や将来の生き方について、さまざまな学問領域に触れるなかでじっくりと考えてほしいという思いをもって授業に臨みました。ただ、学生の授業コメントをみると、総科でどのようなことを学ぶのかよくわからない、総科では広く浅く学ぶだけで専門性が身につかないので就職に

は不利なのではないかななどの不安をいただく学生が多くいることがわかります。総合科学部というところでは一体何を学ぶのか、将来はどうするのかなど、親からも他学部の学生からもそのような質問をされ答えに窮する学生も少なくないようです。総科の学生も教員も、「総合科学」とは何か、「総合科学部」とは何を学ぶところなのか、そうした根源的な問いに向き合い続けなければならないのかもしれないかもしれません。

最後に、近年、総科がこれまでそのあり方を模索してきた学際性や文理融合あるいは横断などといったことを理念に掲げる総合系といわれる学部が各地の大学に設置されるようになりました。広島大学総合科学部は日本ではじめて誕生した総合系学部として50周年を迎えたわけですが、教養部から出発し現在でも全学の教養養育の多くを担っているという歴史的経緯から、従来の教育枠組みや研究枠組みをある程度維持しつつ今日までできました。グローバル化や科学技術の発展が急速に進み社会が大きく変化していくなか、日本初の総合系学部といった歴史にこだわることなく、新たな学部再編へと踏み出すことが必要だと思います。わたしを含め総科で長く勤務する教員からは、また再編かといった「改革疲れ」の声が聞こえてきそうですが、総科が生き残るためにはやむを得ません。その際、これまでのように広島大学の他学部との差別化という狭い考え方ではなく、他大学の総合系学部の取り組みにも学びながら、新しい総科のかたちをつくっていかねばならないのではないのでしょうか。若い同僚たちに大いに期待をするところですが、微力ながら少しでもそれに貢献できればと願っております。

フェニックスの道

広島大学大学院統合生命科学研究科・総合科学部
教授 久我 ゆかり

2008年4月に広島大学総合科学部に着任しました。広島大学とはそれまでまったく縁がなく、農学専門分野一筋の人間にとって、総合科学というものを学ぶところからの着任でした。当初大変印象に深かったことの一つは、教授会(拡大)で文系・理系の先生たちが論理的に、活発に意見を交換していることでした。執行部と構成員の協働により、様々な方向から正しい筋を求めてゆく議論によって、総合科学部の方向が定まってゆきま

した。理系と文系という広い対象と様々な方法論をもつ学者の集団で、かつ文理融合・学際という誰にとっても挑戦的な学部理念に対して、「アカデミア」を中心に据えた議論だったと思います。総合科学部には、異分野の教員を組合せて講義を行うなど、教育の現場にも面白い仕掛けがあります。これらの学部における議論や活動を通じて、少しずつ自分にとっての、総合科学部における総合科学が形作られてきました。

学部運営では、2014~2017年に入試委員長を拝命しました。全学の職につかれた先生の任期1年とその後1期2年でした。入試委員を担当したことがなく、正しい人員配置かと正直思いました。実際に担当してみて、委員長という仕事は入試業務運営に深く関わるため、会議にでていれば務まるわけではありません。当時の支援室の方たちには大変お世話になりながら、学部および入学センター会議を通じて勉強しました。総合科学部では、理念達成のために入試・教務に仕掛けがあります。前期・後期入試では、文系・理系の二つの受験区分で学生をそれぞれ等分で集めますが、その区分は入学後の専門分野の選択に影響させません。これらの学部教育と入試のミッションを考える中、色々な思いに至りました。朝まで入試関連データの解析を重ね、学部の歴史に詳しい諸先輩の意見を聞きながら、当時プログラム制から1学科制になったことを論の中心に据え、1年目に編入学、その後2年間で後期(文理→大括)とAO(一型、フェニックス、帰国生)の改革を行いました。総合科学部のAO(一型)は大括り入試ですが、理系強化の必要性が長く認識されていた課題が残りました。今年度AOサイエンス型入試が導入されました。今後の発展に期待しています。入試業務はわずかな間違いでも社会的に大きな影響がある神経を使う仕事で、月に一度の入試センター会議も緊張感がありました。総合科学部と本部の間の「フェニックスの小道」を沈む心で歩いたことが思い出されます。

このように、総合科学部1年次生集団は文理構成のバランスよく形成されるのですが、専門に進むと自然探究領域に進む学生が少ないことが問題です。社会的に総合科学部が文系と認知されいることも大きく影響していると思いますが、入試とカリキュラムは両輪です。謳い文句どおり、文転のみだけではなく、理転が容易にできる教育体系づくりが必要です。今後特に懸念されるのは、教員評価の研究重点化と大学院で人事が行われる大学改革により、総合科学部総合科学科の人間

探究領域と社会探究領域の教員は一つの大学院、自然探究領域は二つ、すなわち構成員が三つに分かれたことです(国際共創学科も同様)。それぞれ専門学部と横並びに評価されるしくみのなかで学部内では縦に人事が断絶していることは、今後学部教育、ひいては研究力に影響していく可能性があります。文理があること、多様であること、そしてそれらが融合や並立など様々な形で総合科学が進むことが本学部の理念成立要件です。既存の学問体系を軸として教員が集まる学部と異なり、それぞれの学問を深めつつ、総合科学を意識する多様な教員の集団が学部を形成します。この環境で育った学生は確かに分野の壁が低く、様々な分野で活躍しています。開学部以来の特徴であった一学部一学科制から国際共創学科との二学科制になり、情報学部ができ、教養部署としての役割を終えるなど、この10年間で総合科学部に関わる変革が進みました。文理融合・学際によるパラダイムシフトを目指す、アカデミアを体现する学部として、研究と教育で社会に貢献するために、どのような知の集団を形成してゆくのか、あるいは変化してゆくのか、さらなる知恵が求められていると思います。

入試委員会委員長 (2016年4月から2018年3月)

広島大学大学院人間社会科学研究所・総合科学部
教授 平手 友彦

「今晚は雪ですよ。学士会館に泊まらなくていいですか」という小林少年(支援室の小林さん)を振り切って広島駅近くに帰宅した。真夜中三時、車の走る音が消えたと思ったら、おお、外は一面の銀世界。入試委員長の最初の2017年大学入試センター試験(現在の大学共通テスト)初日は大雪だ。運が悪いと思いながら真っ白な高速を大学にゆっくり飛ばした。そういえば、前年度の大学入試センター試験リスニング説明会で(英語リスニング試験が導入された当初は毎年12月に試験担当者が集められた)、わたしのリスニング機器だけ不具合があった。それで入試委員長の「指名」を呼び込んだのかもしれない。だからこの大雪を見た時には運が悪いと思った。しかし、この記録的大雪(広島市のこの日の最大積雪深は19cm)にも関わらず、1月14日朝の試験監督者は誰一人として遅れることなく集合して、大学入試セン

ター試験は始まり、何事もなく終わった。すばらしい。

入試委員長として、ピリピリしない入試業務とリラックスした入試委員会を目指した。「入試は何事もなく当たり前。だから入試業務はピリッとしなければいけないし、入試委員会は緊張感に溢れるのだ」と言われた。なるほど、そうかもしれない。そうかもしれないが、ピリピリでもヒリヒリでもなく、緊張感はやはり少ないほうがいい。

まずは入試委員会。互いを「先生」と呼ばず、呼ばれたい名前で呼んだ(これはわたしがフランス語の講義で25年間実践している。学生は最初の講義で呼ばれたい名前を決めると、卒業までその名前で呼ばれる)。「カロリン、どう?」、「わさきさん、これでいい?」、「ひろみさん、意見ない?」、そして「みなさん、ようござんすか」などと声を掛けて会議を進めた。コンパも談話室(最近「多目的室」という無機質で不幸な名前で呼ばれている。ものごとは「談話」から始まる)で三回もやった(2017年3月13日、2018年3月13日と任期終了後の同年5月18日)。これが幸いしたかどうか分からない。それでも、2016年4月から始まった入試業務は、2018年3月までの二年間、大学説明会、オープンキャンパス入試相談、AO入試、大学入試センター試験、前期日程と後期日程、どれも大したトラブルもなく無事終えることができた。

この間、大きな変化といえば、国際共創学科の設置にともなう新たな入試制度の整備があったが、これも順調に進んで2018年度より無事実施することができた。また、時間をかけたのは、同じ2018年度一般入試(後期日程)の「面接」の制度変更だろうか。面接の方法、評価方法、配点、特に「キーワード」の設定では大いに揉めたが、「面接」シミュレーションでは新人職員の協力もあって、うまく実施にこぎつけた(小土井ちゃんありがとう)。

あっ、そうそう、入試業務と入試委員会の日付を西暦と和暦の併記にした。外国人の受験が多いことや、就学年数の計算などを考えれば、元号は不便なので西暦に統一したかったが、西暦と和暦の併記になった(2018年10月26日)。

入試委員会で一緒だったみなさん、支援室の小林少年、河野さん、土生さん、樋谷さん、本條さん、Merci beaucoup!

入試改革を振り返って

広島大学大学院先進理工系科学研究科・総合科学部
教授 石坂 智

私は、令和2年度から令和3年度の間、総合科学部学部入学試験委員会委員長を務めさせていただきました。その時に行った入試改革である『光り輝き入試総合科学部I型（サイエンス評価型）』について書きたいと思います。これは、スーパー・サイエンスハイスクールやグローバルサイエンスキャンパスなどの理科・数学教育重点化で行った研究活動や、各種学会のジュニアセッション等の研究活動の内容で評価・選抜する、主に理系学生の為の制度です。枠は6名で新設しました。その分、既存のものを総合科学部I型（一般型）と名称変更し、枠は18名→12名と減少させました。今まで一本でやってきたものを、6名：12名の2つに分けた恰好になります。

こうすることで、光り輝き入試でも、専門領域に軸足を置きつつ学際研究を志向する理系学生に道が開けたこととなります。この理系学生は総合科学部でも重要な位置を占めており、今までの光り輝き入試でも学生を得ようとしてきたのですが、あまり上手く行かず、前期試験に頼るしかなかったのです。そこで入試委員会に諮ることにしました。文理融合の総合科学部にしては、理系と文系を分けるのは多少違和感があると感じるかもしれませんが、そんなことはありません。前期試験において理系と文系で科目による配点は異なっているのです。文理融合でも、理系と文系を分けた方の利点があるなら、このようにすれば良いのです。総合科学の入口の前に立ったばかりの高校生の彼らに、総合科学部は文理融合であるからということで入口を狭めてしまうことになるのは、学生にとってメリットがありません。むしろ、理系でも立ち止まって見直すことで、自分の能力を活かせる道がもう1本あり、それを可能にしてくれる総合科学部とは面白そうな学部だと興味をもって貰えたら、そのほうが良いと思うのです。この入試改革には、そんな願いも入っているのです。

しかし、総合科学部の光り輝き入試と言え、多くの優秀な学生が受けられ、GPAも高く、かなり上手くいっているところです。その人数を割ってまで減らすとなると慎重になります。既存の光り輝き入試では、実施にかなりの人的資源を投入していますが、選抜人数を減しても影響がでない

範囲内にしなければなりません。一方、サイエンス評価型も公正さを担保すると、結構な人的資源を投入する必要があるようです。それらの結果を考えて現在のよう形になりました。もちろん、これは人的資源という一側面での話で、実際には沢山の要素が複雑に絡んでいます。例えば、学生を自然探究領域、人間探究領域、社会探究領域の3研究領域に分けたとき、サイエンス評価型で評価する人数は全体の丁度1/3になっていると思うかもしれません。確かにそれも一要素ですが、それだけで決まっではないのです。

また、サイエンス評価型では理科・数学教育重点化を使いますが、時期尚早だと思っていた理科・数学教育重点化が、ここ数年で入試に使えるようになったという利点があります。これは新課程に関係しており、今後、研究評価型選抜を多くの大学で行う可能性があるそうです。ただ、総合科学部がサイエンス評価型を取り入れる理由は前に述べた通りで、新課程とは直接関係はありません。また、光り輝き入試としては、経験が長くあるI型（学力試験なし）で行います。

サイエンス研究評価型は令和6年度実施分から始まっていますが、1年目は広報の問題もあるため、確定的なことは2年目以降でなければ言えません。皆で作成したものですから、これからも注視していきたいと思っています。

入試雑感

広島大学大学院統合生命科学研究科・総合科学部
教授 石田 敦彦

入試についてはこれまで喧々諤々、様々な議論があり、またそれに伴って改革も行われてきたようですが、少なくとも我が国では最適解が未だ得られていないことは周知の通りです。入試と言え、正岡子規の「墨汁一滴」というエッセイには興味深い一節があります。彼が受験し、合格した明治17年の大学予備門（現在の東京大学教養学部）入試の様子が面白おかしく描かれています。英語が不得意だった子規は、試験場で英単語が分からないで困っていたら、幸い隣席の受験生からその単語の訳がヒソヒソ伝わってきたまでは良かったのですが、それを聞き違えてトンデモない珍訳を答案に書いたとのこと。元より全く準備もせず場馴れのために受けただけで、これは落ちたなと思いきや、発表を見に行くと、教えてくれ

た受験生は不合格で自分は見事合格していたそうです。今なら不正行為として大騒ぎになっているところですが、のどかと言うべきか大らかと言うべきか、当時の“坂の上の雲”を目指した時代の空気がうかがえるエピソードです。ただ注目すべきは、当時も相当な難関であったこの入試を突破して大学予備門に入学してきたクラスメートには、正岡子規を始め秋山真之、夏目漱石、南方熊楠など、明治日本を各分野で牽引した超個性派の実力者が揃っていたことです。

もう一つ紹介しておきたいエッセイは、アジア人初のノーベル化学賞受賞者・福井謙一先生の指導教官であった児玉信次郎先生の「孔子は弟子に試験をし採点したか」という一文です（『京大史記』p. 442-443）。児玉先生は、今日の大学入試について、「すぐ忘れてしまうような些細な知識を若い学生に精根をつくして勉強させ、しかも一定時間内にできるだけ多くの○×をつける練習だけに精力を浪費させ、受験産業を繁栄させているに過ぎない」と書かれており、最後に「私は大学の先生に何点取れるか、一度（共通）一次試験を受けてごらんささいといいたい」と耳の痛い指摘でエッセイを締めくくられています。

さて、総合科学部創設 50 周年の記念誌に入試の話題を書くことになったのは、令和 4~5 年度の 2 年間にわたり学部入試委員長を拝命したからということのようです。平成 19 年に本学部着任以来、どういった訳か学部入試委員には縁がなく、関矢学部長に委員長就任を打診された際には、ヒラ委員の経験もない自分にいきなり委員長が務まるのかと随分躊躇しました。しかし、他に適任がいないと説得され、迷いつつもお引き受けしたという次第です。任期の 2 年はあつという間でしたが、大過なく任期を全うできたのも、ひとえに優秀で経験豊富な委員各位、職員各位の献身的なサポートのおかげです。ここに改めて感謝の意を表したいと思います。

任期中、自分に与えられた最大のミッションは、これまで数年にわたって検討されてきた「光り輝き入試（総合選抜、いわゆる AO 入試）サイエンス研究評価型」を実際に実施することでした。この入試は、簡単に言うと共通テストなどの筆記試験を一切課さず、書類選考と高校時代に取り組んだサイエンス研究のプレゼンだけで合否判定を行うという画期的なもので、教育学部のある先生から「かなり思い切った入試ですね」と言われたことが印象的でした。実際、令和 6 年の時点では、主要な国立大学の理系で「筆記試験一切なし」の

このような入試を行っているところはほとんどないのではと思っています。

前例のない入試を行うにあたっては、様々な事例を想定し、できるだけ丁寧かつ公正な選考が行われるように、入試委員の先生方や事務方と議論を尽くして実施体制を構築しました。また、この入試を全国の優秀な受験生にアピールするために、広報手段についても様々な検討を行い、最後はやはり人海戦術と、各種学会や発表会の高校生発表の現場に赴き、発表者の高校生と直接議論する中で本入試の紹介を行い挑戦を勧めるといった、スカウトまがいの“勧誘”も行いました。「筆記試験一切なしの入試があります。試験は嫌いだがいサイエンスが大好きな人はぜひ」と広報チラシを渡した時の高校生たちの笑顔が忘れられません。

筆記試験の功罪に関しては様々な議論がありますが、共通テストに象徴されるように、現在の筆記試験中心の入試は、児玉先生が指摘されたように、正解があらかじめ定まっている課題を短時間にいかに多くこなせるかという瞬発力が最も問われるものであるように思えます。情報処理技術が飛躍的に発達した現代においては、そのようなタスクはコンピューターに任せ、人間は人間にしかできない、より高度なことに注力すべきです。先が見通せないこれからの時代においては、ルーチンワークを効率良くこなす能力よりも、答えの容易に見つからない、あるいは正解がないかもしれない問題の海に漕ぎ出し、多少時間がかかろうとも様々な試行錯誤を繰り返しながら、新たな地平を見出すような能力がますます求められるのではないかと思います。今後はそういった能力に長けた、あるいはその素養を持つ人材を見出し、育成することが重要です。令和 6 年度入試から新たに始まったこの「サイエンス研究評価型」入試で、これまでの総科生とは一風異なるどのような“豪傑たち”が広大総合科学部に集まってくるか、今後の展開が楽しみです。

総科設立 50 周年に際して

広島大学大学院人間社会科学研究所・総合科学部
教授 水羽 信男

僕は 1960 年に広島市に生まれ、1978 年に広島大学文学部史学科に入学して以来、他大学は知らず、文学部と総科での経験しかない。だが、1996 年に総科に異動してから、教養教育で自分の視野

を広げ、総合科学部と大学院での学生指導と、分野を異にする教員との交流を通じて、学際的な研究に触れたことは、僕の教師・研究者人生にとって、得難い有意義な体験だった。総科に赴任した際に、同じ広大史学科出身の先輩教員から聞いたアドバイスは今でも印象深い。曰く、我々は文学部で狭い専門性を高めることを第一の課題として努力してきた。いわば最高の「寿司職人」になることを目的として腕を磨いてきた。しかし、ここ（＝総科）のお客（＝学生）は、マヨネーズまみれのサーモンの甘い酢飯を平気で注文してくる。それに対して「本当の寿司というものは！」と力むのは間違いだ。相手のニーズに沿って最高の「寿司」を提供するのが我々の任務だ。

2006年に、今ではなくなった総合科学研究科が出来た時、その開設の祝賀セレモニーは落涙の式典だったという（僕は不参加）。それは当時の研究科長が人文系の教員だったことがひとつの要因だったと思われる。当時は総合科学部の人文系の研究を志した学生が、学部時代の指導教員のもとで、博士課程まで学際的な研究を続けられるようにすることが悲願だったからである。この点は今の若い人には理解しがたいかも知れない。少し回り道なるが説明しておく。1980年春、僕は「広島大学学生訪中団」の一員として、はじめて大陸の大地を踏んだが、この旅行団は総科の地域研究研究科の修士学生と学部生が中心となったものだった。そこで知り合った総科の先輩たちは、博士課程のないことで進路に苦慮していた。総科ができたときには、すぐにでも博士課程ができるような説明が教師からなされたが、博士課程はいつまでも設置されず、しびれをきらして就職する人もいた。当時は今とは異なり、出身大学とは異なる大学院に入ることは稀だった。こうした人文系の学生たちの無念さは、1986年の社会科学研究所国際社会論専攻の成立をもって一応は解消された。しかし本来は人文系なのに、社会科学研究所に間借りするような形でしか、教育・研究ができなかった。こうした状況を克服して、「自前」の一貫した学際的な博士課程を作れたことは、とても意味があったのである。

もともと人文系の大学院については、総科の教員が文学部研究科に参画して、新たな専攻を立ち上げることが、1980年における全学的な合意だった。それを文学部が認めず計画が頓挫したのである。どうして反対したのか、このことに関わって思い出すのは、文学部の助手時代、英文学のある大家が酒宴で教養の英語の授業を指して「チーチ

ーパッパは総科の教員に任せて、自分たちは英文学の精粹を教える」と言ったことだ。当時の学部間のやり取りについて憶測に基づき論断することは僕の任ではない。双方にそれぞれの道理もある。だが、一度は決まり、学生たちにも夢を与えた博士課程の計画が実現しなかったことは、忘れてはならないと僕は感じてきた。というのも、総科が広島大学のなかで、どのような位置にあったのか、その歴史をリアルに理解しておくことは、総科の構成員にとって、ひいては広島大学のすべての構成員にとって必要なことだと考えるからである。大学という社会にも相互に尊重しあうのではなく、自己の利益を最大化しようとする人々はある。その歴史を正視することから始めなければ、同じことを繰り返す可能性はなくなるだろう。

これからの時代を総科がどのように生き延びるのか。それは僕のささやかな経験から考えても、そう簡単なことではないと感じる。全学の教養教育のほとんどを担当することで、総科は広大ななかで居場所を見つけてきた側面もあった。近年では創設以来の一学部一学科という学部の理念を変えて、新学科IGSの設置を引き受けた。その選択には、目に見える広島大学の改革を担うことで、総科の存在価値を高めるという戦略的側面もあったろう。僕自身は、こうした学内政治にかかわる能力も意欲もなく、単なる傍観者として、決まったことを僕なりに支えることしかせず、わがままに思う存分教育・研究に専心させてもらった。この点はとても感謝している。ただ総科を研究・教育の場として大切にしようとするならば、つまり自分のステップアップのためだけの「腰掛」としないのならば、まわりの状況はその歴史も含めて理解しておく必要があるとは考えてきた。

若い人たちと総科の今後のさらなる発展を願って筆をおく。

借りは返せるか？

広島大学大学院先進理工系科学研究科・総合科学部
教授 荻田 典男

『総合科学部』という言葉は、耳なれない言葉でありますけども、それを、我々のそういう理想を表現する適切なる日本語が存在しないが故に、借りている言葉であります。」

これは、飯島宗一学長による学部創設記念式典

での祝辞である。創立 50 周年記念式典に続く同窓会大会において、記念映像の一場面として流された。また、広島大学総合科学部報、飛翔 1 号にも掲載されている。同号には、総合科学部の名称が「教養学部」や「広域基礎科学部」といった候補の中から選ばれたとの経緯も記されている。上述の祝辞は、式典から同窓会大会の一連の行事の中で最も印象に残るものであった。しかし、思うに、学部創立以来「総合科学とは何か？」という問いかけこそ、借りている言葉を返し、真の言葉を探る試みであったと思う。

記念式典に続き「越境する力 ～ジャーナリズムの世界を駆けて～」と題した、堀川恵子氏による講演があった。粗くまとめると、総合科学の精神は「越境する力」ということであろう。創立 50 周年において、総合科学を体現する言葉は「越境」であると感じる。そこで、総合科学を表す言葉を振り返ってみた。以下は、周年事業誌、飛翔などに記されているものである。

越境から連想されるのは、「越境のアドベンチャー」であろう。叢書インテグラレ 008「越境のアドベンチャー」（総合科学研究科設立記念シンポジウム）として出版されている。編集後記に、「『総合科学とは何か』を問い続けた 30 有余年にわたる総合科学部における教育と研究の成果だと、自負してよいだろう。・・・既存の学問的枠組みにとらわれない柔軟な探求心、越境を恐れない冒険心であった。」とある。

『广大生の読むべき 101 冊の本』には「越境する知」と題された章があり、文理の境を超えて知の総合を目指すとの主旨が述べられている。これは、総合科学部の 101 冊の本プロジェクトによる出版である。これらの記録から、越境という言葉が、総合科学の精神にとっても合致していると感じられる。

遡って少々こじつけるが、越境は学部創設の理念「学際領域、境界領域」が発端であると思う。境界への意識は、新たな分野の創成に繋がる。「文理融合」、「理系に強い文系、文系に強い理系」も越境と関連する表現であろう。このように、越境は、総合科学の根幹をなす言葉と思われる。

他には「Integrated Arts & Sciences」を挙げたい。文理融合と同意であろうが、Arts and Sciences をどのように捉えるかの意味深い解説が、飛翔 87 号、99 号の巻頭言、38 号の特集 15 周年に掲載されているのでそちらを参照されたい。特に、ここで触れておきたいのは、Integrate に関する式部先生（第 2 代学部長）の座談会での発言（飛翔 18 号

P.19）である。海外の大学を訪問した時、「『総合科学部（Faculty of Integrated Arts & sciences）からやって来た』と言いますと、その Integrate というところに、どこでも大変興味をもたれました。『何をもとにした総合か』と聞かれる。」とある。このような観点で「総合科学」の見つめ直しも大切であろう。

「重点的ジェネラリスト」は、個人的に好きな言葉である。30 周年記念シンポジウムの記録として出版された「シンポジウムライブ・総合科学!？」（叢書インテグラレ 001）の中で佐藤先生（第 10 代学部長）が述べられており、「一人総合科学」と「共同総合科学」で研究を蜘蛛の巣のように同心円状に広げ、「重点的ジェネラリストというスペシャリスト」たるべしと、魅力ある表現が並んでいる。重点的ジェネラリストは、総合科学部の設立理念「一般教育と専門教育の一体化」を表現している。他にも、鳥の目と虫の目（平岡敬、「この 10 年のあゆみ」創立 30 周年記念事業報告書 P.34）、「T 字型の人材」（中坪孝之、飛翔 74 号、P.33 研究室紹介）、「スーパージェネラリスト」（岩永誠、飛翔 100 号、P.4 巻頭言）なども同様の意味を持つ言葉であろう。

他にも総合科学部を表現する言葉はたくさん見られるが、最後に「総合知」に触れておきたい。総合知とは、「多様な『知』が集い、新たな価値を創出する『知の活力』を生むこと」と内閣府で定義されているが、第 6 期科学技術・イノベーション基本計画における総合知の記述により詳しい記述がなされている。そこには、「今後は、人文・社会科学の厚みのある『知』の蓄積を図るとともに、自然科学の『知』との融合による、人間や社会の総合的理解と課題解決に資する『総合知』の創出・活用がますます重要となる。」とある。これは総合科学部の理念そのものである。

借りている言葉「総合科学」は、「越境」で返せたのか？答えは否であろう。なぜなら、現代社会の諸問題の解決を掲げるのであれば、目まぐるしく移り変わる社会を見据え、自らを常に問い続ける必要があると考えられるからである。借りている言葉は返せるか？我々は無限への挑戦を続けなければならない。

総科の教員として教壇に立つこと

広島大学大学院人間社会科学研究所・総合科学部
教授 丸田 孝志

私が広島大学文学部東洋史学専攻に入学した1983年、総合科学部は創設9年目で、苦勞して作り上げたシステムが順調に回り始めていた時期だったと思う。教養の講義を受ける東千田の総科の建物は、他学部の建物よりもずっと新しく、一部の教員室はプレハブの建物の中にあつた。

教養科目「アジア史」受講の最初の日、私は講義終了後に担当の楠瀬正明先生にいろいろな質問をしようと待ち構えていた。しかし、豈図らんや1級上の先輩方3名が、すぐに先生を取り囲んで、あれやこれやと質問を始めた。それは教養を請うというのではなく、自身の関心をぶつけて、時に講義の内容を批判するというものであつた。先輩方は揃いも揃って実に体格がよく、自信に溢れ、皆腕組みをして、この年から教壇に立つばかりの華奢な楠瀬先生を囲んで20分くらいは質問が続いた。このような質問攻めは毎回続き、結局通年の授業で私が質問をする時間は全くなかつた。先輩方と先生のやり取りの中身は全く覚えてない。そこから何一つ学べなかつたのだから、身の丈に合った経験をしたということだと思ふ。これが私の「総科」原体験である。

東洋史の5級上の先輩には水羽信男先生がいて、その後も長くお世話になって今日に至る。初代学部長の今堀誠二先生は、1977年に退任されていて、その講義を受講することも、お会いすることもなかつた。しかし、私の卒論のテーマは、意図したわけではないが、今堀先生の研究の一部にすっぽりかぶってしまい、学部時代には大著『中国の民衆と権力』を読み、当然ながら以後もその論著に学び続けることとなった。

学部4年になり、大学院進学を決める一方で、中国留学も考え始めたが、当時、大学院に進学しつつ留学するというのはかなり異例なことで、東洋史の先輩方のアドバイスも受ける一方で、総科の檜山久雄先生や郭春貴先生にもご相談して、留学を決めた。以上のような総科との様々なご縁によって現在の私がある。

それから20年後の2007年、私は楠瀬先生の後任として、キャンパスは違うが同じ教壇に立つこととなった。それ以前に所用で楠瀬先生のお部屋をお尋ねした時、自分の研究の話をしたところ、「今堀先生が聞いたら、泣いて喜ぶだろうね」と

言っておくれたことは、素直に嬉しかった。

この間、総科は3回のカリキュラム改訂を経ており、私の着任の年は10プログラム移行と総合科学研究科創設の翌年であつた。それ以前のことはよくわからないが、10プログラム制は、その後の編成に比べると、教員の数も学生の数も互いの顔がよくわかり、まとまりやすい規模であつたように思う。そのような環境の中、在任中に安野正明先生、布川弘先生がお亡くなりになられたことは、くれぐれも残念である。布川先生のご逝去は、新たなプログラム再編後、領域主任として激務の中であつた。総科の発展を支えてくださった先生方のご冥福を改めてお祈りしたい。

総科の教員は誰しもが経験するように、学部必修科目やオムニバスの授業、プロジェクト、あるいは日々の講義において、総合科学とは何かということを実例をもって学生に示さなければならない。総合科学という学問自体が存在しない以上、やはり様々なレベルでの方法や視点、対話が求められる。このような課題は、かつて東洋史の先輩方が「専門」の範疇で教員に議論を挑んだこととは異なる次元の難しい問題である。

ただ、学生達は自らの興味関心に従い、我々が考えるよりも積極的に文理を跨いだ他領域の科目を履修しているのも事実である。2020～21年に評価委員会で総合科学的な学びの現状について調査したことがあつた。カリキュラムで課せられている他領域の科目6単位以上履修の条件について、過去3年(2018～20年)のデータでは最低限度の6単位でクリアする学生は7%と少数派で、12～20単位履修した者が6割弱、それ以上履修した学生は17%に上つた。その背景には、学生らの関心が多様で、模索しながら方向性を確定したいという事情や、核となる関心があつて、それを多様な視点から学びたいという姿勢があると考えられる。個別のインタビューでは、「それぞれ話をしてみると全然違うことに興味を持っていくのに、よく授業がかぶる人もいます。それぞれの関心をひとつの学問で説明することは難しく、これは社会で起こっていることが文系理系の枠組みで分けることができなかつたことと似ているのかもしれない」という意見を聞いた。様々な切り口からの関心が、我々の授業に向けられている。そのように学生と教員の日々の実践の中で、それぞれの総合科学が試みられていくのだと思う。

また、できることとやりたいことが異なり、文転、理転する者も少なくない。文系・理系の要素

が混在・融合している授業科目群もあるため、厳密な数値を得られないが、上の過去3年間の理系入試、文系入試での入学者の内、少なくとも毎年それぞれ10名程度が、文転、理転していた。身近で印象的な例では、理系入試で入学したが、歴史が学びたいということで社会探究領域を選択し、単位取得に長年苦しみながらも、最終的には優秀論文賞を獲得した学生がいる。このような模索が許されるのも、総合科学部の特徴であろう。

最後に、数年前、博士課程後期の学生さんが選んだテーマが、上述の今堀著の研究対象に重なり、改めて同著を読んだところ、新たな視点につながる重要な事実を史料に基づいて指摘した箇所を見つけ、1970年代初めという研究上の制約の大きい時代においてここまで明らかにした調査力に驚いた。彼女は論文を順調に刊行し、大学院修了後も引き続き今堀先生が先鞭をつけて長く顧みられなかった分野の研究を続けている。今堀先生が聞いたら、泣いて喜ぶだろうか。

教員にとっての総合科学と学生にとっての総合科学部

広島大学大学院統合生命科学研究科・総合科学部
名誉教授 山崎 岳

総科に長く在籍した1教員として、私にとっての総合科学と、私が個人的に感じた総合科学部の学生への影響を、偏見に満ち満ちた視点から記してみる。20年前以前の話から始まるが、ご容赦いただければ幸いである。

1986年秋、総合科学部に生化学分野の助手として赴任した。学生時代を教養部の無い理工系の単科大学で過ごしたので教養教育組織の概念も知らず、また総合科学という言葉は、SF小説のネクシャリズムの訳語でしかお目にかかったことが無かった。

赴任当時の総合科学部は「学生が専門分野を選択するのに1年間猶予がある学部」であり、2年次以降は所属コースでしっかり専門教育を受けるといったカリキュラムであった。当時は文理融合の教育という概念は弱かったと思う。研究面では、上司にあたる教授も助教授も理学部出身で、私はミニ理学部で研究をしているという感覚であった。「総合科学」は学部の名称であり、自分の研究とは縁もゆかりもないものであった。

総合科学というものを意識したのは、学部や総

合科学研究科の将来構想や運営に関与するようになってからである。文部科学省や大学から、学部の強みや他との差別化の説明を求められた。ミニ理学部、ミニ文学部ではダメで、総合科学部としての存在意義をエヴィデンスを添えてアピールせよ、という課題が多かった。研究面はミニ理学部でもよいではないか、という本音を押し殺し、当時の岩永研究科長から出てきたアイデアを基に、能力の範囲で対処してきたつもりである。学部の研究業績という視点で見ると、文系と理系はなぜ分かれたのかという研究や、身体運動学と言語学の融合研究など、この学部ならではのテーマで質の高い研究成果の例もあるが、その数は多くない。大部分は個々の専門領域での研究業績からなっていた。私自身の研究業績にも「総合科学」の気配はない。後述する学生主体で行った異分野融合研究も、成果は生化学の専門誌で報告した。ただ、研究面ではできるだけ境界領域、融合領域を対象にしようという意識は持っていたと思う。

研究内容はともかく、総科の教員集団の特徴として、分野を超えた仲間意識、一体感が強いように思う。他学部ではありえない異分野の先生方と会議で同席するし、そこでの共同作業や教育の場での交流の機会も多い。教養教育担当者という共通意識も一体感にプラスに作用しているのかもしれない。

さて、学生はどうであろうか。

赴任時に学生の研究指導をはじめた時に、総科の学生は一味違う、という印象を持った。理学部や工学部出身者しか知らなかった私にとって、化学の研究室に属しながら地学系の実験手法や生物に関する知識もある程度持っており、それらを研究の進展に活用する学生は新鮮であった。総科生は、異分野に対する心理的障壁が低いように思う。他学部の学生が多かれ少なかれ持っている、自分の専門分野とそれ以外の分野との「心理的区別」が弱い。専門性が低いという自己意識の裏返しでもあろう。実際には多くの学生はある程度のレベルの専門的能力も習得しているのであるが。このような資質は、「学部の雰囲気」が醸し出すものではないかと思う。その雰囲気は、異分野の同級生との交流が密であること、どの分野の講義も自由に受けられる制度、また教員も分野を超えた一体感があることなどが作り出しているのかもしれない。

立場上、社会で活躍している卒業生と話をする機会が何度かあった。その際、その活躍に総科生の特徴がプラスに働いていると感じることが多

いが、本人はそれを意識していないことがしばしばであった。当人も柔軟性や視野の広さが強みだとは自覚しているが、それが学部で培われたとは思っていない。もちろん学部で培われたのかどうかは分からないのだが、当人に「雰囲気からの影響」について話をすると、私の見解に賛同してくれて、それ以降の学生への講演や依頼した文章などで、総合科学部のメリットとして触れてくれることもあった。決して押し付けではなく、当人もそう思ったからであるが、文章に記載されたものは、後日文科省への評価書類のエヴィデンスに使った事もある。

学生による異分野融合の成功例についても触れておこう。心理学の坂田省吾先生のドクターの学生と私のドクターの学生による学生提案型の融合研究である。彼らのアイデアは成功し、成果は複数の論文となり生化学系の専門誌に掲載された。これは博士号取得レベルまで専門性を高めた学生同士であったからうまくいったので、卒業研究レベルでの融合研究は難しいように思う。

以上、個人的な見解であるが、総合科学部の教員にとって、「総合科学」、または異分野融合研究を継続的に行う機会は少ないのが実態であろう。しかし、この学部でしか成しえないユニークな研究のチャンスもある。それへのアンテナを張っておくと、自身の業績に取ってプラスとなる場合もある。教育面での「総合科学部」という仕組みは、学生の資質に独特の強い影響を与えているように私は感じる。ただ、教育の成果をエヴィデンスとして外部に示すのは困難である。卒業生が自主的に教育の成果を自覚して発信してくれるよう水を向けるのは、少しだけ有効かもしれない。

屋根までとんだ：移転前の東千田キャンパスを襲った台風

広島大学大学院統合生命科学研究科・総合科学部
教授 中坪 孝之

自分が広島大学総合科学部の助手として広島に赴任したのは、1991年(平成3年)4月のこと。総合科学部はまだ東千田キャンパスにあり、建物はぼろぼろだったが、統合移転を2年後にひかえていたため、ほとんど手が入られることがなかった。自分があてがわれた居室は、古いプレハブ



(上) 1991年当時の東千田キャンパス
(下) 屋根が飛ばされシートで覆われたプレハブ
ともに著者撮影(1991年)

の建物の二階で、植物標本の防虫剤の臭いが充満していたため、常に換気扇を回しておかなくてはならなかった。1991年9月27日、そんなキャンパスを台風19号が襲った。

広島に来て2ヶ月後に同業者の妻と結婚したが、自分は広島、妻は東京の遠距離結婚で、いろいろ都合をつけながら、東京と広島の間を行き来していた。その日も仕事が終わると、当時まだ広島市内にあった空港に直行した。台風が接近しているのは知っていたが、その時点では風も強くなかったもので、何とか飛んでくれるのではないかと期待していた。ところが、空港に到着すると、すでに欠航が決まっているとのこと。どうやら、運航の可否を議論するまでもない猛烈な台風らしい。仕方なくバスで自宅アパートの近くまで戻ったが、その間に風が強くなり、やがて身の危険を感じるほどになった。コンビニで夕食になりそうなものを買ってから家に逃げ込み、手の届くところに懐中電灯を置いて食べていると、突然電気が消えた。懐中電灯のおかげで食事は終えたものの、真っ暗な部屋では何もできないので、ごろごろしていると、研究室の学生から電話がかかってきて「先生の研究室の屋根がありません!」とのこと。

半信半疑でいたら、今度は別の研究室の先生からも電話があり、「君の研究室の屋根が飛ばされたようだが、危険だから見に来ないように」とのことであった。やはり本当らしい。どうしようもないので、真っ暗な部屋で一夜を過ごすことになった。

この台風は猛烈な風が特徴で、広島市での最大瞬間風速が広島地方気象台観測史上第1位の58.9mを記録した。翌朝には風も収まっていたので、歩いて大学に向かったが、家を出て目に入ったのは、想像を絶する光景だった。瓦が散在した道路、崩れたモルタルの壁に半分埋もれた車、倒壊しかけた建物。いつも通っていた道路を見慣れない大きな物体が塞いでいたが、近くによってみたら人家の屋根がそのままの形で落ちていた。当時の広島市内は、運転が荒いことで有名だったが、停電で信号がついていないため、どの車もノロノロ運転だった。

キャンパスに到着し、自分の居室のあるプレハブに近づくと、たしかに屋根がほぼなくなっている。あとで聞いた話では、となりの建物の屋上に敷かれていた砂利が風で飛ばされてプレハブのガラス窓を破り、そこから吹き込んだ風で屋根が飛ばされたということであった。幸い雨がほとんど降らなかったため、部屋に置いていた物品の被害は少なかったように記憶している。これがきっかけで、プレハブから教育学部の建物の一室に移動できたのもラッキーだった。

一番の問題は停電だった。一度、復旧しようだったが、間もなく再発してしまい、その後は数日にわたり復旧しなかった。台風通過時がほぼ満潮時と重なり、風で飛ばされた海水の塩分がその後の雨で流されて塩害を引き起こしたということであった。昼はなんとか活動できるが、夜になると何もすることがない。ラジオをつけて、ワインを飲みながら、ひたすら電気がつくのを待った。ラジオには電力会社の人が呼ばれていたが、いつ復旧するか目途が立たず、埒が明かないため、アナウンサーの口調が相当厳しかったのを覚えている。

自分は東千田キャンパスに2年しかいなかったが、移転前のぼろぼろのキャンパスでもアクティブに教育・研究を進めていた当時の先生方、学生諸子には本当に頭が下がる。あれから30年以上経ち、現在の東千田キャンパスには同時に思い出させるものはほとんど残っていないが、毎年、猛烈な台風が来るというニュースを聞くたびに、あの日の光景を思い出すのである。

教養と総合。私たちはそれを今、語っているだろうか

広島大学大学院人間社会科学研究所・総合科学部
教授 浅野 敏久

私が広島大学総合科学部に赴任したのは1996年、4月になっても雪が舞う年でした。それから28年間お世話になってきたのですが、総科50年の半分以上の期間で在籍していると思うと不思議です。ながらく東千田を知らない新参者という立ち位置だったのに。先輩の諸先生方から、総科設立当初、いかに癖の強い教員が多かったとか、その方々のカオスなエピソードなどを教えられました。私が赴任した頃にも、エピソードに出てくる名物教員や、総科創設期を知る方々も多少残っていました。個性的な方が多かったです。総合科学はいかにあるべきか、教養教育はいかにあるべきかに答えようとする熱意や情熱が大きかったように感じます。今は、少し統制されているというか、業務の範囲内で対応するというか、淡々と対処している印象があります。義務的な仕事が増えている上に、研究実績をあげることへの過度な圧力があるせいか、教員一人一人に余裕がなくなっているのかもしれませんが。

私は、学生の時は8年間教養学部において、その後就職した先が民間の総合研究所で、それから本学に転職し、職を得た先が総合科学部、2000年代になってからは、広島大学総合博物館の創設に関わり、館長や副館長の仕事も兼務しました。あらためて振り返ると、自分は、教養教育と学際的な研究を本務とするところから、離れたことがないのだと思います。この意味では、総合科学部という職場は自分にとって、とても居心地のよいところだったともいえます。総科50年、とくにこの20年間ほどを振り返って、総科らしいというか、強く印象に残っていることを、あえて2つあげると、1つは教養教育における総合性・学際性をいかに具体化するかという試みと、研究活動における総合性・学際性をいかに具体化するかという試みになります。

前者については、教養部を解体せずに総合科学部という新しい学部を創設したときから一貫して試行錯誤されていることです。その1つとして、学生からも教員からも賛否両論あったパッケージ科目があります。教養教育でどのような科目を選択するかは、学生が自主的に選ぶのが筋ですが、学生は早く専門を学びたいので教養科目を軽ん

じる傾向があり、専門に関係する科目や簡単に単位を取れる科目を選択しがちでした。そこで教養科目を「定食のように」(当時しばしば使われていた表現) 関連性のある科目を組み合わせ、それを学生が選択するようにしました。同時にそこに提供される科目は、〇〇学のような既存の学問分野の基礎ではなく、担当教員それぞれが学際性や、他の提供科目との関連性を意識したものにしようということになりました。ある意味で属人性が強く、担当教員にしかできない科目であり、今の本学の教養教育で求められている、当該分野の教員ならだれでも担当できるような科目名で提供されるものとは正反対でした。学生からすると興味のない科目を受講しなければならなかったり、興味深い科目が開講されていたとしても、自分が選択していない他のパッケージ科目を選択できなかつたりすることへの不満が生まれました。また、教員にとっては、時間がたつにつれて、科目間の関連づけが形骸化するとともに、教員の退職などで科目ができなくなると新しい科目の担当者を確保できない問題などが生まれました。結局、廃止されてしまいましたが、この頃は、教養教育はどうあるべきかや、学際性や総合性をいかに担保するかが、教員間で公式・非公式にずいぶん議論されました。21世紀の教養シリーズというパッケージ科目の副読本を出版したのも、苦労はしましたが、教養教育を担当する教員が互いにどのような研究を行なっていて、どんな授業をしているのかを知るよい機会になりました。

一方、後者の研究活動における総合性・学際性をいかに具体化するかについても、いろいろな試みがなされました。総合科学研究科を設立するに際し、21世紀科学プロジェクトという研究・教育ユニットをつくったことも、自分は当事者としてかなり関わることになったので印象深いです。自分が関わったのは、環境と文明研究プロジェクトで、この単位で院生を受け入れ、プロジェクトに関わらせながら OJT (On the job training) で学生指導を行うということになっていました。このために、毎年度、調査旅行を企画したり、研究会やシンポジウムなどを企画したり、活動報告をポスターにして廊下に掲示したり、報告書を制作したり、プロジェクトとして教養科目を担当したりと、かなり負担の大きなものでした。ただし、これを行うことで院生が増え(特に留学生)、教員間の研究交流の機会も生まれました。プロジェクトの資金を使うことで、集団での現地調査・見学会が行えたり、成果の発表の機会を得られたりする

など、メリットもありました。総合科学研究科が改組された後、これは総合科学推進プロジェクトと学生独自プロジェクトとして、総合科学部で継承されています。

このように考えると、総合科学部においては、総合科学とはなにか、教養教育はいかに実践するか、絶えず挑んできたといえます。ただし、冒頭に書いたように、この数年は、教職員に余裕がなくなってきていて、委員会やワーキングなどの公式の場以外で、これらの話題が熱く議論される機会が減っているように思います。教員間の研究室などでの雑談、宴会や慰安旅行などもほとんどなくなりましたし、個人個人がばらばらになっています。私自身は鬱陶しくなくていいなと思っていましたが、これからの総合科学部を考えていく上で、それでいいのかなという懸念も最近を抱えています。

総科の聖書学

広島大学大学院人間社会科学研究所・総合科学部
教授 辻学

海外の聖書学会に行つて、自分は広島大学で教えていると言うと、「神学部か?」と尋ねられることが多い。いやいや、日本の国立大学にはキリスト教神学部はなく、自分は総合科学部というところで、古典文献学ないし宗教学の一つとして新約聖書を講じている、と何度同じ答えを繰り返したかわからない。

ドイツ語圏では、国立(連邦政府と州によって運営されている)大学に、キリスト教の牧師養成を担う神学部が存在し、聖書学も神学の一分野として営まれている。もちろん日本では事情は異なるが(牧師の養成は私立大学の神学部や教派神学校が行う)、しかし啓蒙主義の影響下に発達した聖書学を日本で学問として認めさせたのは、国立大学出身の研究者たちであった。東京大学文学部教授だった前田護郎という新約聖書学者の門下で多数の研究者が育ち、西欧に留学して、「本場」の聖書学を持ち帰り、発展させたのである。広島大学総合科学部に聖書学を根づかせた佐竹明先生(在職1971~1990年。2024年ご逝去)はその一人であり、前田門下から出て、ドイツとスイスに長く留学された後、ハイデルベルク大学で神学博士号を取得された。先生は、日本の新約聖書学を国際的な水準に高めた功労者である。ヨハネ黙

示録を扱った佐竹先生の博士論文(1966年)と注解書(2008年)は、それぞれドイツで非常に著名な叢書から出版されており、Satakeの名前は海外でも広く知られている。先生が2011年に日本学士院賞・恩賜賞を受賞されたのは、その国際的な活躍が評価された故であり、同じ聖書学を営む者たちにとっては、かつては宗教的営みとしか見なされていなかった聖書研究が、日本でも学問として公に認められたことを示すという意味でも、非常に大きな喜びであった。

佐竹先生は、総科創設時からの教員だが、当初はドイツ語科目の担当者として赴任されたと聞く。しかし、聖書学の専攻ということで、「宗教学」をも担当するようになったそうである。結果的にそれが、広大総科に「聖書学」の伝統を作ることとなった。

佐竹明先生の後を引き継がれたのは、旧約聖書学者の木幡藤子先生(在職1990~2009年)である。木幡先生は、東京教育大学大学院を経て、ドイツ・マールブルク大学へ留学し、出エジプト記に関する博士論文で学位を取得された(1986年にドイツの有名な研究叢書から出版)。旧約聖書の研究もまた、日本では国立大学を主な舞台として営まれ、世界的に知られた研究者を輩出しており、木幡先生はその先駆けとなったお一人である。

総科では主としてドイツ語科目を担当しておられた斎藤忠資先生(在職1978~2007年)も、スイス・チューリヒ大学で博士号を取得した新約聖書学者である。しかし総科に來られてからは、途中で研究分野を変えられたこともあり、聖書学に携わることはあまり多くなかったようである。

私が総科に赴任したのは、2007年4月だが(後任人事の関係で、木幡先生と在職期間が重複した)、佐竹先生以来続いてきた総科聖書学の蓄積に何度助けられたかわからない。大学図書館には、通常ならキリスト教系私学の図書館にしかないような欧米の聖書学専門書や学術雑誌がたくさん収められている。聖書学が学問として認知されていることが、総科では当たり前のように感じられるのもありがたい。自分もこの伝統を損なうことのないよう努めていきたいと常々思っている。

国立大学では珍しい「聖書学」の講義だが、毎年20~50人程度の受講者がある。学生諸君は、西洋文化を知るための必須の教養として、またキリスト教という宗教への関心から参加してくれているようなので、聖書の学問的な分析という本来の主題を超えて、聖書と文化、歴史との関わりなどについても授業の中で話すように努めてい

る。また、数は少ないが、修士課程・博士課程で新約聖書学を修めて学位を取得する大学院生も存在する。東京大学でも、また筑波大学(旧東京教育大学)でも、現在では聖書学を専門にする講座は存在しないようなので、この広島大学が聖書学研究の拠点になれば良いのだが、担当者の力不足もあって、まだ実現していない。

広島大学総合科学部への着任顛末記——〈美学〉でメシが食える時が来た！

広島大学大学院人間社会科学研究科・総合科学部
教授 桑島 秀樹

私が、広島大学総合科学部に助教授(当時)で着任したのは、2004年4月1日。国立大学の独立行政法人化のはじまった年。すでに20年以上、「総科」で過ごしたことになる。

群馬の伊香保温泉近くの田舎町で生まれ、地元のみ市立小・中学校、県立高校を卒業。1年の浪人の後、平成元年つまり1989年の春、大阪大学文学部に入学。3年生での学科選択で「美学(当時)」への進学を決めた(劇作家で文明批評家の山崎正和先生もいた)。当時、阪大美学(総科と同じ1974年創設)には、美学・文芸学、演劇・音楽学、東洋・西洋美術史と3専攻6講座があり、連携しながらワイワイとやっていた。「西の美学・芸術学の拠点」の地位を固めつつある時期だった。

大阪での美学徒の生活は、学部、大学院、JSPS研究員と図らずも15年に及んだ。生活費を稼ぐための塾講師歴も10年を越す。当初、親類縁者もない彼の地でのカルチャーショックは強烈だったが、バッテラ、お好み・たこ焼きなど粉モンの味にもなじみ、地域で微妙に違う関西弁の聞き分けもできるようになった。JSPS研究員最後の年、非常勤先での採用話も流れ、途方に暮れる。延ばしにのばした博士論文の提出も真剣に考える時期に来ていた(博士課程後期進学後8年目!)——文系の博士号なんて「伝統的に」生涯の研究の集大成なのに……。が、しかし、そういう時代も終わりつつあった。

まさしくこのタイミングで、総科の助教授ポスト「芸術文化論(芸術学・表象文化論・文化創造論など)」の公募が出る。当時の総科には、音楽美学の原正幸先生(教授)、日本美学の青木孝夫先生(助教授)が在籍。ただし、西洋美学の初代教授

の金田晋先生は退職してすでに数年。公募の1年ほど前には、イギリス中心の庭園美学研究者の安西信一先生（助教授）——10歳年長の兄貴分だったが、2014年2月永眠——は東大に転出していた。4月の着任後に知ったが、ギリシャ・ローマの美術史学の長田年弘先生（助教授）も、その春から筑波大学に転出だった。

広大の総科が、関西以西、九州以東の「美学・芸術学の拠点」であることは応募以前から知っていた。広大美学・芸術学の創始者の金田先生（東大出身）と阪大での主指導教授の神林恒道先生（京大出身）とは、同世代で、東と西の盟友。その縁で、私も大阪時代から広島芸術学会の会員だった。また当時、神戸女学院大の濱下昌宏先生は、「イギリス美学」の草分け的な存在で、すでに安西さん（何くれと気にかけてくれた氏に親しみを込め「さん」付けで）とも懇意にしていた。さらに、濱下先生は、韓国・嶺南大の関周植（元韓国美学会会長）とも東大美学ゼミの仲間で、青木先生など広大の研究者らと1980年代末より「日韓（学生）美学研究会」を組織し、韓国の美学者たちと盛んに交流を重ねていた。イギリス美学、特にE・パークの崇高論研究で濱下先生や安西さんに接していた私は、日韓の国際交流の場に導かれ、自然な成り行きで広島の教員や院生の皆さんとも交流するようになっていたのである。

そんな背景もあり、JSPS 研究員最後の年の晩秋、翌春から糊口をしのぐあてもなく、木枯らしに身を震わせていた私が、博士論文の仕上げに全霊を傾け、入念に応募書類を用意したことは当然の理だった。阪大に提出したばかりの博論を含め、公募期限ぎりぎりに申請書類を提出、翌年2月に面接に呼ばれる。結果、忘れもしない2004年3月5日——私の34回目の誕生日！——に、ハイデガー研究者で「臨床哲学」の推進者・古東哲明先生（教授）から電話で、「教授会投票での採用決定！」の通知をもらう。急遽、月末までに「15年の大阪暮らし」を整理し、原爆、そして大阪同様、粉モン（&ヤクザ）で有名な街へとやってくるようになった。わが人生のGo West アゲイン。

そんなこんなで、バタバタと広島へ。4月初めから授業も担当。最初は、「広大エントツ」がよく見える西条下見の賃貸マンションに住んだ。キャンパスまでは、道を渡って徒歩2、3分。桑島研究室・総科A棟7階724室までは、徒歩20分。ちなみに、私の研究室は、以前の安西研究室。彼が使った木製机と文具もそのまま残っていた（そして現在も使っている。ちなみに、ラヴェルによ

れば、安西さん以前の持ち主は、バイロン研究の上杉文世先生だったらしい。）。赴任1年前の「木枯らし」の季節には想像もしなかったが、研究室に泊まり、晩秋の朝、窓から覗くと、遠い山並みの際まで雲海がひろがっていて、その美しさに息をのんだ。

当時の所属は、「制作科学講座」。芸術学の祖アリストテレス『詩学』の鍵概念「ポイエイン＝芸術制作する」からの命名と聞く。広島に来たからには腰を据え「桑島美学をおやりなさい」と激励してくれた古東先生の紹介で、2008年5月には最初の単著『崇高の美学』（講談社選書メチエ）も世に問うことができた。当時の講座には——上述の美学・芸術学の先生方のほか——ヘラクレイトスの専門家で倫理学の高橋憲雄先生、ドイツ文学の小島基先生、フランス古典主義文学・演劇研究の村瀬延哉先生らがおられ、先輩教授陣として温かく見守ってくれていた。最後に、忘れてはならないのは、講座事務員の竹田朋子さん。着任以来、2022年度末の定年退職までずっと一緒。2010年代半ばまで講座では一番下の「弟分」だった私のよき相談相手でもあった。

総合科学科の6歳の「^{トンセン}同生（トンセン）」、IGS

広島大学大学院人間社会科学研究所・総合科学部
准教授 張 慶在

2018年、総合科学科に国際共創学科（IGS）という、40才以上年の離れた「同生」が誕生しました。辞書には兄弟姉妹を意味すると書いてあるものの、日本ではあまり普段使われない同生という言葉は、私の出身である韓国では、トンセンと読んで妹と弟を合わせた意味で使われます。ジェンダー・イシューが非常に重要なこのご時世に、ジェンダー・ニュートラルな言葉として日本でも再評価する必要があると思いますが、すみません。少し話が逸れました。

一般的に同生が生まれたときの兄・姉の感情は多少複雑です。新しい家族構成員の誕生は喜びである祝福すべきことではありますが、急な環境の変化で戸惑う場合もあります。特に、それが40歳以上の年齢差であればなおさらでしょう。さらに、IGSはかなり異質な同生です。同じ総合科学部の一員であり、基本的な理念を共有しているものの、領域の代わりに視点があり、学生の人数は40人

で高校の1クラス程度です。さらに、この異質的な同生は帰国子女なのか、英語を喋ります。

IGSの初期（今もまだ初期と言えますが）に周りから良く耳にした言葉の一つは「浮いている」でした。ただ、正直に私自身もIGSの誕生とともに広島大学に来た身であり、当たり前だと思っていることのどこか浮いているのか、戸惑いを感じたこともあります。とにかく、その言葉は2つのグループすなわち総合科学部（IAS）とIGSの間に存在する壁を象徴する言葉ではないかと思えます。

こうした壁は、例えば受講生の分布にも現れます。新学期になると、他の先生方はどうでしょう、私は授業にどんな学生が履修登録をするかをかなり気にする方です。特に、IGSの専門科目をチェックします。主に見るのは学科の分布です。他の科目同様、IGSの専門科目も全学に受講の機会が開かれています。他学部で申請した学生がいるのにIASから一人もいないときが多く、その時には同生として少ししょんぼりします。ただ、最近では幸い、IASから申請する学生が少なからず現れています。同生が思うほど変なやつではない、と思い始めたのでしょうか。だと良いですが。

IASとIGSの間の壁は、必然的なものかもしれませんが。伝統を重視する文化において、国際的な背景を持つ多様な個性が登場し新たな試みをするについての戸惑いあるいは反感。IGSのスタイルとそれに対する評価は、大げさに言うと現代日本社会の縮図とも言えると思います。ただ、それを乗り越えられないものとして捉えるより、互いの差異を理解し多様性について考える機会ができればと思います。

意外な旅路

国際協力銀行外国審査部
神田 実鈴

7年前、私は総合科学部に入学した。当時新設された国際共創学科の一期生として、「トップとボトムを繋ぐ国際協力の担い手になる」と、大きな目標を胸に、大学生生活をスタートさせた。

入学したての頃の私は、よく言えば天真爛漫、悪く言えば少々身の程知らずで生意気で、学問とは無縁な学生だったと思う。好きな女優があるドラマでスペイン語のセリフを話している姿に憧れて、第二外国語にスペイン語を選び、当時はか

なり後悔したが、そのおかげで出会えた恩師の青木利夫先生には、大学院までお世話になった。学生時代に書いたレポートや授業の資料は、知識の宝庫で、社会人になった今でも全て大切に保管している。卒業後、引っ越しの荷造りをしていた際に学部2年生の時に提出した「欧米大陸間文化研究」の振り返りシート（青木先生が毎授業ごとに学生が提出した感想に対して手書きでコメントを下さっていた）を読み返したのだが、支離滅裂な私の感想に毎回新しい視点やヒントを付け加えて返信してくださっていたおかげで、私は少しずつ自身の問いを深められていたのだと後になって気付いた。

総合科学部では、文系・理系の垣根を超え、多種多様な学問に触れることができた。様々な見方や考え方、視点に触れながら、数年かけて自身の軸となるものを構築する。そしてその軸を中心に、関心のある問いに対してどのようなアプローチができるか、一点に偏らない広い視座を持って研究することができた。時々迷子になることもあったが、その経験さえも学問の奥深さを知るきっかけとなった。

社会人になった私は現在、政府系の金融機関で働いている。配属先ではマクロ経済分析や、外国政府の信用力を審査する仕事をしている。一見、大学院での研究（メキシコの地域研究）とはかけ離れたもののように感じるかもしれない。配属され、周りに経済学修士や博士が溢れていても、ほとんど学んだことのない経済学の専門性を求められる時も、むしろ新しい視点がこれから獲得できることに喜びを感じられるのは、総合科学部で様々な視点に触れさせていただけただからだと感じている。

総合科学部で学んでいなかったら、私は今の職場に巡り会うこともなかっただろう。素晴らしい先生や先輩、友人、後輩たちとの出会いに恵まれ、今こうして50周年誌に寄稿する文章も書かせていただいていることに感謝し、これからも学ぶ楽しさを忘れることなく生きていきたい。

総合科学を学んで

大阪電気通信大学 准教授
安達（寺田）未来

わたしは2005年4月に総合科学部に入学し、それから博士課程前期、後期と、2014年3月まで

の9年間、総合科学研究科に在籍しました。現在は理工系の私立大学で勤務しております。そこでは、共通教育機構に所属し、教養科目を主に担当しています。予測困難な時代において、教養教育の一層の充実が求められる昨今、総合科学部での9年間の学びは、今のわたしにさまざまな影響を与えています。

自身の職場では、入学生向けオリエンテーションのなかで教養科目のガイダンスを行ったり、初年次生向けの入学前動画を作成したりと、初年次生の教養の授業をコーディネートしていますが、毎年「教養を学ぶ意味」をどう伝えようか、試行錯誤しています。また、異分野の教員によるオムニバス形式の教養の授業では、異分野のつながりを意識すること、学部・学科の枠を超えて社会のあらゆる問題にアプローチすることの楽しさを、自らの経験とともに学生に伝えています。

学生自身が深刻に受け止めている社会問題は多岐に渡ります。家族などの身近な問題から、ジェンダー平等、多様性、経済格差、国際紛争、地球環境問題に至るまでの、さまざまな社会全体の課題解決に向けて、既存の分野の枠を超えて、多くの学問に向き合うことがますます必要になると思います。また、求められる知識もますます増大・細分化し、課題解決に必要な能力も多岐にわたっていくなかで、最先端の専門知識や科学技術の開発や実用化にとどまらず、長期的な視点にたって社会や人間に対する知識や理解の総合、多様な価値観の融合が、今後より一層求められるようになっていくでしょう。

エキスパートを育成するなかで、そうした教育の根幹に携われることを有難く思うと同時に、文理融合や異分野協働の環境で多くの時間を先生方や仲間と共有し学んできたことを、フルに活かしていきたいと思っています。

「ほっ」と一息

広島大学総合科学部 2018 年卒業
竹内 音寧

総合科学部創立 50 周年、おめでとうございます。執筆の依頼をいただいたご縁に感謝を申し上げます。卒業研究で「未就園児を育てる母親」の論文を書いた私は偶然にも現在、一歳になったばかりの子どもを育てています。以下は研究当時の思い出と、研究対象の立場になって気づいたこと

を述べます。

未就園児とは、幼稚園や保育園に通っていない、または通う前の子どもの指します。特に3歳未満を指すケースが多く、感情をコントロールできない赤ちゃんと一日中過ごす母親には自由な時間がほとんどありません。気分転換をしようにも、幼い子を連れて出るのは苦勞しますし、外出先も限られています。

そんなお母さんがたが家以外で「ほっ」とできる場所を大学構内につくったり、西条地域のお母さんがたと学生（私を含む複数名）の関係性の変化を観察したり、学生が子育て支援の担い手になる可能性を複数の観点から考察したのが私の卒業研究でした。

自分の卒業論文が岡本賞にノミネートされたときは、表彰と無縁の人生を送ってきたからかその希少さをまったく理解できず、最終選考会への出席確認に対して「その日はアルバイトを入れる予定で…」と回答するほどでした。もうどこから説明すればいいのやらと困惑されていた教授の表情は生涯忘れません…。

そんな頓珍漢な私が、総合科学部を卒業し、社会人になり、29歳の現在は「未就園児の母」になりました。この立場になって得た気づきを3つ紹介します。

1つ目に、いつどのようなタイミングで家以外の居場所をほしいと思うのかを観察しました。研究当時は、お母さんがたのヒアリングをもとに「泣き止まない赤ちゃんと閉鎖的な空間で過ごすことに苦痛を感じて外出したくなる」ことを想定していました。

結果、子どもが生後六か月の頃に外出先を探し始めました。一説によると0歳は脳が発達する黄金期で、新しい体験で五感を刺激すればするほど良いのだそうです。育児本でこの知識を得た途端、たくさんの刺激を与えなければとプレッシャーに駆られ、場所探しに明け暮れました。

ちなみに、研究当時に想定していたことも起こりました。子どもが生後十か月になって以来ずっと続いています。甘えてぐずる我が子に、家事などで疲弊して応じてあげられないときは外に連れ出します。人の目があると笑顔で接してあげられると思ったからです。あくまで私のケースですが、居場所をほしいと思う場面がより具体化されました。

2つ目は、家以外の居場所は一か所だけだと足りない可能性があることです。いくつか巡ってようやく居心地の良い子育てオープンスペースを

見つけた私は、嬉しくて2日連続で通いました。しかし「ここ以外に行く場所がないの？ママ友はないの？」とスタッフに思われたいか、そして子どもがその場所に飽きてしまわないか不安になり、結局、月に3回しか通わなくなりました。これは居場所を増やすことができれば解決しそうです。

ここで質問なのですが、「月に3回」という頻度は多いと思いますか？それとも、少ないと思いますか？私はこの立場になってようやく、卒業研究でお世話になったお母さんの気持ちを理解したような気がします。以下が3つ目の気づきです。

学生当時、赤ちゃんとお母さんが過ごしやすい場所として「学生プラザの会議室」を見つけたので、そこに大学生も集めて月に一度の交流会をしました。この開催頻度を決める時に意見が分かれました。お母さんがたは「週に一度」を希望されましたが、私を含む学生側は「月に一度」が限界だと伝えました。「週に一度」は単純に多いと感じたほか、どんなトラブルが起こるか予測できなかったので常に最低二人の学生を配置したかったのです。

これを振りかえると、母親と学生双方の立場を理解できる仲介者がいるとより良い形になったと思います。私が当時のお母さんの立場でも同じく「週に一度」、なんなら二回と答えるかもしれません。学生に遊んでもらうと赤ちゃんはいい刺激を得るでしょうし、その間は母親の「ほっ」が実現されます。また、当時のお母さんがたは「多くの世代に赤ちゃんとふれあう経験をしてもらおう」ことを目的に活動していたので、「他にいく場所はないの？」などと思われる心配はなく、むしろ堂々と通えたと思います。

ちなみにこの交流会は、私の卒業後も、教育学部に所属する後輩によって何代かにわたり継続されました。しかし、新型コロナウイルスの流行で対面交流が難しくなり、ついには活動を終わってしまったと聞きます。

社会人になってから知ったのですが、疲れを一時的に癒す支援を「レスパイトケア」と呼ぶそうです。コロナがなければ今も続いていたかもしれないこの活動を、少々異なる形でも実現できないかと想像を膨らませています。有意義な学生生活のおかげで、こうして卒業後も、当時を思い出してはより良い未来を考える日々を楽しんでいます。

総合科学部が私の人生に与えたもの

広島大学大学院先進理工系科学研究科・総合科学部
助教 片山 春菜

総合科学部の50周年を迎え、私は自身の歩みを振り返り、今ここに総合科学部の一員としていることを心から誇りに思います。私は、総合科学部に入学し、その後大学院へと進学し、現在は助教として総合科学部の教育と研究に携わっています。まさに総合科学部で学び、育ってきました。ここで得た多くの経験や思い出が、私の教員・研究者としての人生を支えてくれています。

総合科学部で学んだことは多数ありますが、その中でも特に「柔軟性」を身につけたと感じています。この柔軟性は学問におけるものだけでなく、人生全般における考え方にも大きな影響を与えました。入学前の私は、自分や他者を何かしらの属性や区分に当てはめ、社会の固定観念に疑問を抱くことがありませんでした。「こうであれば良い人生」という考えがあり、そうあるべきだと自分自身を縛っていた部分もありました。

総合科学部での学びを通じて、様々な学問に触れ、異なる分野や考え方、背景を持つ人々と出会いました。これらに意識的にも無意識的にも触れることで、自分の凝り固まった考えが解きほぐされました。自分が当たり前だと思っていたことが実はそうではなく、他の人々にはそれぞれの物差しがあって考え方が異なることに気づくことができました。自分になかった視点や、考え方に触れた時、新たな気づきを得て自分の世界が少し広がったように感じました。その中で、多様性があることはとても面白いことで、統一されるべきものではないと理解しました。これにより、自分らしさの大切さに気づき、個々人の違いを尊重する視点を持つことができるようになりました。

その結果、私自身を縛るものが少なくなり、固定観念から離れたことで、本当にしたいことややりたい姿がより鮮明に見えてきました。そして、最終的に研究者になるという決断に至りました。総合科学部に入っていなかったら、今の私はないと思います。研究者という道に進むことになったのは、指導教員の畠中先生をはじめ先生方の熱心なご指導と、ワクワクする学問との出会い、総合科学部で培った柔軟性のおかげです。

総合科学部での経験は、私の人生にとってかけ

がえのないものであり、私を育て、支え、挑戦を続ける勇気を与え続けてくれています。今後は教員として、50年の歴史を受け継ぎ、後世に総合科学部の精神を伝えるとともに、総合科学部の教育と研究をさらに発展させていけるよう尽力していきたいと思います。これからも総合科学部が多様な学問が交わり、多くの学生にとって学びと成長の場であり続けることを心から願っています。総合科学部に出会えたこと、その一員として共に歩んできたことに、心から感謝しています。

総合科学部での思い出 ～一期一会の出会いと共に～

広島大学大学院人間社会科学研究所
博士課程前期2年 菱川 慶人

“Life is like a box of chocolates. You never know what you’re going to get.”

広島大学総合科学部創立50周年記念誌の発刊、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。岡本賞受賞者として、自身の思い出と共に執筆できますこと、大変嬉しく思います。

冒頭の文章は、映画「Forrest Gump (1994)」で、主人公フォレストの母親が、余命わずかな中、息子であるフォレストに告げた言葉です。総合科学部で過ごした4年間、そして同大学院人間総合科学プログラムでの2年間、私はこの台詞に表されている内容を心に留めながら歩んできたように感じています。

総合科学部に入学した2019年。様々なことに興味・関心があり、文理の枠を超えた学びを深めたいと思い、入学したことを憶えています。言い換えれば、学びたいことや将来の目標が明確にあったわけではなく、面白そうな講義や活動があれば参加し、そこで自分を少しでも成長させよう、といった心持でした。

「総合科学」という名前の通り、講義内容やその分野も多岐に渡り、参加する学生にも色々な内容に興味・関心を持たれている方々が多かったです。まさに、学際的な学びを実践することができる理想的な環境でした。大学生として、講義や実習等の学業面はもちろん、サークル活動や同期との旅行、班活動等、とにかく自身の目の前にあることを、出会った人々と共に全力で楽しむ毎日を過ごしていました。

だからこそ、2020年に突如として猛威を振るっ

た新型コロナウイルスの影響は甚大でした。それまでの日常が非日常へと変化し、新たな日常（あたりまえ）が生まれました。劇的な社会環境の変化と、思い描いていた大学生活とは全く異なる状況に落胆したのは、自分ではなかったと思います。

そのような環境の中でも、「今できることを全力で楽しむ」という思い、「いつか必ず良いことが起きる」という信念を持ち続けて生きていました。そして、このような考えを持つことができたのは、家族、友人、先生方、事務の方々等の支えがあったからだと思っています。岡本賞をいただくことができたのも、専門領域を超えて忌憚なきご意見をくださった先生方、研究室のメンバー、そして指導教員である小川景子先生のご支援のおかげです。当時はがむしゃらに進んでいましたが、振り返りますと、たくさんの方々との「一期一会の出会い」に支えられていたと実感します。

6年間、山あり谷あり、数えきれない思い出と共に、総合科学部での毎日を過ごすことができました。何が起るのか、この先どうなるのか分からない中でも、必ず良いことが起きると信じ、その環境で巡り合ったことを、精一杯楽しむ姿勢を大切にしてきました。改めて振り返りますと、学際的な学びができる総合科学部だったからこそ、そして総合科学部で出会った人々と一緒だったからこそ、このように歩み続けることができたと思えます。

冒頭で紹介した映画「Forrest Gump (1994)」の終盤、主人公フォレストは、「生き方」に対する自分なりの結論を見つけます。

“I don’t know if we each have a destiny, or if we’re all just floatin’ around accidental-like on a breeze, but I think maybe it’s both. Maybe both is happenin’ at the same time.”

運命があると信じて生き続けること。流れに身を任せ、置かれた状況で自分の全力を尽くすこと。生きる上ではどちらも大切で、必要不可欠な要素なのだと思います。

私は本年度を最後に、大学を離れ、社会へと出ていきます。自分の信念を持ちながら、目の前のことに全力で取り組み、楽しみ続けたいと思います。そして、振り返ったときに「幸せだった」と思える人生となるよう、走り続けます。

創立50周年を迎えた総合科学部も、変化の激しい現代において、これから様々な改革を求められる機会もあるかと思っています。創立50周年を、先輩方が繋げてくださった歴史の節目として、そ

して未来へと続く伝統の通過点として、これからも「世界に一つの総合科学部」として、走り続けていって欲しいと思っています。

総合科学の思い出

広島大学総合科学系支援室
松岡（上脇） 葉子

学部4年生当時、なまけたろう、という手乗り人形（ゆるい表情でアロマ袋内蔵、お手玉のような絶妙な重さで手に乗せたり握ったりするとリラックスできるというもの）をお供に卒論を執筆していました。卒論のテーマは主に土壌肥科学でしたが、どう総合科学するか、で考えあぐねていました。

卒業論文と言うと、壮大な研究だとそれまで思っていました。しかし、実際に研究の世界に足を踏み込んでみると、卒業論文なんて入口も入口、エントランスのロビーに到着するか否か。世界は広くて科学ははてしなく、人ひとりの人生かけてというか、人類と科学という構図で戦っても世紀の大発見を一発当てる以外のクリティカルヒットは中々ないなという現実と直面し、今自分にできることは一体何か卒業論文をやる意味は何なのか、となまけたろうを片手にPCと向き合う日々でした。

ある日、ぼうっと画面を眺めながら、お供のなまけたろうをぼん、ぼおん、ぼおんと上に向かって放っては取る、放っては取るを繰り返していました。

今の自分の渾身のオリジナルとは、という問いが煮詰まるにつれ、なまけたろうの飛距離はどんどん上に伸びてゆき、天井近くになってきたところでふと、手のひらに帰ってこなくなりました。あれ、と思ったその瞬間、私の席と隣接して、天井までない高さのパーテーションで仕切られてつくられていた指導教官室から「わああああ、なんか降ってきた！」と先生の叫び声が。たろうくんは、高跳び様のジャンプを見せて、指導教官様の頭上にダイブしたのです。

たろうくんに降られたWSK先生は、今や教授となられて、てんてこ舞いの大忙しですが、当時はまだ広島大学に赴任して時間も浅く、准教授時代だったのでいち学部生の取るに足らない発見や疑問にかなりの時間を割いて向き合ってくださいました。当時の研究室4年生皆が文系出

身者で、化学の知識があまりないということで、高校の化学の問題集みたいなものを持ってきて化学講習会を開いてくれたりしていました。その他にも、実験で夜遅くなるので研究室皆で夜ご飯にホットプレートでサンマやお好み焼きを焼いて食べたりと（近隣の研究室から臭い問題で超怒られました。が時効ということで笑）和気あいあいと悩んでいった結果、研究としてはどういう出来なのかよくわかりませんが、個人的には納得のいく論文が書けたと思っています。分野の全然違う研究室にお願いして押しかけて、分析をさせてもらったりもしました。生物学から、地学から、生態学から、様々な知見をもらいながら、広範囲の角度からテーマを探って行きました。結果的には浅く広く、そんな感じの出来です。

行ったことのないフィールドに、躊躇せず果敢に挑戦していく、で、段々つかんでいく、私の中での総合科学はそんなイメージです。その、果敢な挑戦を、おうおうやってきたか変な奴が、と嬉しそうに受け入れてくれる先生たちがそこに居る、という感じです。

現在私は、広島大学の事務職員になり、今は学生や教員を支える立場となり総合科学部に居ます。享受する側から提供する側に回ったことで、見え方が変わるもの、新たに見えるもの良くも悪くもたくさんです。大学が置かれている状況、時代、様々なことに取り囲まれながら仕事をしています。50年も経つので、変わりゆくのは当たり前なのですが、どう、総合科学らしさを保っていくのか。総合科学とは何か。を自分なりに考えながら仕事するようにしています。ひろだいそうかはせかいにひとつ、であるために、それはどういう意味なのか。

私の考えている問は、総合科学部関係者の数だけそれぞれに答えはある事だと思います。そして、そのそれぞれの答えを答えの数だけ受け入れる器、それも総合科学かなと勝手に考えています。私がそうであったように、学ぶことを楽しいと思える場所であり続けて欲しいです。

総合科学部創立50周年によせて

広島大学総合科学系支援室
鳥山 剛

総合科学部とのご縁に感謝。

私は、広島大学に事務職員として平成14(2002)

年10月1日に採用されました。最初に配属された部署は理学部庶務係で、その後、人事部服務グループ、医歯薬学総合研究科等支援室原爆放射線医科学研究所分室を経て、呉工業高等専門学校に3年間出向しました。広島大学に復帰後は、附属学校支援グループ、再び人事部服務グループ、さらに病院総務グループを経て、現在に至っております。こうみると、現在まで総合科学部とは無縁だったように見えますが、広島大学採用前から、すでに総合科学部にご縁がありました。

私は、大学の学部は地方の私立大学でしたが、縁あって平成11(1999)年から平成13(2001)年までの2年間、広島大学大学院文学研究科(西洋史研究室)で修士課程を過ごさせていただきました。私の専門分野は古代ギリシア史でしたが、同じ研究室に、総合科学部で科学技術史、科学社会学を専門とされていた成定薫教授(現在、広島大学名誉教授)のゼミを受けていた仲間がいました。当時、私はこの分野にも興味がありましたので、毎週一回、総合科学部まで歩いて行って、ゼミに参加させてもらっておりました。ゼミでは、19世紀に創設された「イギリス科学協会」の背景を論じた英語の原著を講読しており、古代ギリシア史とは全く異なる分野でしたが、根本ではつながっていることに大変興味を覚えました。

また、文学部西洋史研究室ご出身の長田 浩彰教授(当時は准教授でした)が毎月一回、総合科学部でドイツ語読書会を開いてくださっており、これにも参加させていただいておりました。古代ギリシア史研究では、英語のほか、ドイツ語、フランス語による研究文献が多く、ドイツ語の読解力も身に着ける必要がありました。記憶が定かでないのですが、たしか「普通のドイツ人」とホロコーストの関係を論じたゴールドハーゲンのドイツ語原著を読んでいたと思います。構文が複雑に入り組んだ難解なドイツ語で、読書会ではそれぞれ一定のページを和訳するよう割り当てられておりましたので、読書会の前日は半泣きで準備していたことを思い出します。

それはさておき、広島大学総合科学部創立50周年に当たり、今更ながら「総合科学」の意味を自分なりに考えてみました。「総合」とは、手元にある『広辞苑』によると、「個々別々のものを一つにあわせまとめること」とあります。次に「科学」の項目を引くと、「世界の一部分を対象領域とする経験的に論証できる系統的な合理的認識」とあり、字義通りには「諸科学を総合した学部」ということとなります。一方、「総合科学」の英文は

Integrated Arts and Sciences ですが、こちらの英文の方が、「総合科学」の意味を正確に表現しているように思います。

ご存知の方には釈迦に説法ですが、Integrated Arts and Sciences のそれぞれの単語の語源を探ると、いずれもラテン語です。Integrated は integer が語源で、①手をつけていない、ためされていない、未使用の、②そこなわれていない、無傷の、③全部の、全体の、④疲れていない、元気のよい、⑤未決定の、⑥偏見のない、公平な、⑦年齢によって弱められていない、若々しい、⑧健康な、健全な、⑨けがれのない、高潔な、という意味があります。Arts の語源は ars (現在でいう「アート(芸術)」の語源)ですが、①術、技術、②性質、習慣、行状、③(複数形で)手段、方法、④こつ、技巧、⑤(複数で)策略、術策、⑥仕事、職業、⑦学問、学術(学芸)、知識、⑧学問体系、理論、⑨学術(教科)書、⑩芸術;芸術作品と、実に様々な意味を持つ語です。Sciences は scientia が語源で、現在は「自然科学」を連想させる「科学」を意味する語として流布していますが、これは18世紀になってからのことで、その本来の意味は、①知っていること、②知識、心得、③学識、博識です。このように、語源からみると、「総合科学」とは「ためされていない手段と知っていることの学」、すなわち「誰もやったことのない新たな知を創造する学」であり、それを実践する場所が「総合科学部」ということになると思います。

すでに総合科学部では「総合科学推進プロジェクト」、「学生独自プロジェクト」のほか、第14第総合学部長である関矢寛史先生の発案による「総科カフェ」があり、様々な「知」の刺激合いによって新たな知を生み出す素晴らしい取り組みがなされております。これらはすべて総合科学の意味に沿った実践であり、「総合科学」の英文を Integrated Arts and Sciences とされたのはまさに慧眼で、調べてみて、深い感銘を受けました。

私が大学院文学研究科を修了してから23年が経ちましたが、今、こうして広島大学総合科学部で事務職員として働かせていただいていることなど、夢にも思っていませんでした。このような不思議なめぐり合わせと、総合科学部という新たな知が創造される刺激的な現場で仕事をさせていただけることに感謝しますとともに、総合科学部の今後のさらなる発展を祈念いたします。

A Journey of Belonging: Turning the Pages of My Time at the School of Integrated Arts and Sciences

Hiroshima University's Graduate School of
Humanities and Social Sciences
Elahe Nassr

It is the 50th anniversary of the establishment of the School of Integrated Arts and Sciences. Over the past half-century, many scholars and professionals across various fields have been nurtured here—a testament to a lifetime of education and growth. My own journey at the school, however, began more recently, in the last decade.

The Department of Integrated Global Studies was established in 2018, coinciding precisely with my joining Hiroshima University. Thus, my university life and the department were born at the same time. Now, as a PhD student in the same school, I am nearly seven years into creating memories here.

The IGS department remains an unforgettable experience for me. It has opened a new chapter in my life, one whose pages I am still turning, and it has become a core part of my being. It was here that I had the opportunity to meet friends from all around the world and to learn about everything from anthropology to cultural studies, to tourism, and to literature—with many more realms yet to explore.

Becoming a member of the School of Integrated Arts and Sciences was beyond a mere academic journey. I met some of my best friends here, people I still spend time with today. I had the privilege of learning countless things from many of my professors who showed me much more than academic knowledge. The beauty of this experience lies in the fact that learning extends beyond attending coursework. It involves spending time with mentors, friends, and staff, through which one learns professionalism, support, kindness, intellectuality, and empathy. Most importantly, this journey helped me discover my passion for research and career endeavors. I owe a great deal to the School of Integrated Arts and

Sciences, my professors, my friends, and the staff. After all, what could be more joyous than realizing one's passion in life?

The school is a place that nurtures you. It recognizes both your achievements and failures, witnessing both your good and bad days.

I have often met people outside the university who graduated from the School of Integrated Arts and Sciences—be it at a newspaper publishing house, a museum, or a social gathering. These encounters always come with a little smile and a little nod, as if to say, "Yes, we recognize each other." Despite all our different paths, we come from the same place: the School of Integrated Arts and Sciences at Hiroshima University.

Nowadays, when I introduce myself to the junior students at our school, I often find myself saying, without thinking, "Oh, by the way, I am one of the first-batch students of IGS." I have noticed that many of my professors introduce me similarly.

These moments have shaped a part of my identity—a treasured experience.

When one reads a good story, it often inspires reflection on one's own life based on those narratives. Recently, I read a book by Simone De Beauvoir that resonated with me, as it touches on the theme of nostalgia, which is a significant part of my research. She said, "I have discovered the pleasure of having a long past behind me."

As I write these lines, I realize that indeed, my years at the School of Integrated Arts and Sciences were a significant and pleasant part of my life.

As our time and experience here turns into nostalgia, the school continues to nurture its new members and prepare professionals for our society and for the world.

In one of his books, Haruki Murakami wrote, "People need a place they can belong."

For many of us, the School of Integrated Arts and Sciences was one of those places—a place we belong to, a shared experience, and a collective memory that we cherish.

フェニックス、翔ぶ

広島大学大学院総合科学研究科
博士課程前期2年 小松 正幸

私が総合科学部に入学したのは2011年春のことである。それまで私は地元テレビ局に30年近く勤めていた。当時私は満州国の高等教育機関「満州国立建国大学」に興味を持っていた。建国大学は1938年に関東軍が設置した文科系大学で「五族協和」を建学の精神とし、日本・中国・朝鮮・モンゴル・白系ロシアなど、様々な出身の若者が一堂に会し学んだ大学である。これをサリーマンをしては調べきれないと思った事が入学の動機であった。

当時の地域研究講座の主任教授、また教養ゼミの指導も、亡くなられた布川弘先生であった。初めての教養ゼミの時、私はこれまでの癖で「起立！礼！」と号令をかけた。私が勤めていた会社では会議などの時普通のことだったのである。やらなければよかった…。それ以来ゼミの中で浮きまくり、若い学生からはほとんど無視されてしまった。これではやっていけないと思っていた頃、私と同じように、フェニックス入試で入学した年配者が他にも大勢いて連絡をとりあっていることがわかった。毎週ランチ会があり、勉強や、学生生活について悩みや意見交換をしており、年2回の懇親会もあった。そこで幹事を務めてから交友関係がドンドン広がっていった。

そうするうちに、ある先生に声をけられて、学部を3年で退学し総合科学研究科に進学した。指導は丸田孝志先生、中国近現代史のエキスパートである。先生のご岳父様は残留孤児として広島に帰国された方でもあり、満州国に対するメンタリティが共有できるものと思ったからである。

総合科学研究科で私の学生生活は一気に花開いたように思う。まず先生方と年齢が近いこと、これは多くの先生が私に一目置いてくださったように思う。また吉林省長春市であった学会に丸田先生に連れて行っていただいた。長春は満州国の首都だったところであり、建国大学も終戦までここに存在していた。またここで、かねてからの友人で、当時東北師範大学の日本語の主任教授だった林嵐先生と再会し、丸田先生にも紹介することができた。これが2015年末の頃であり、それからである、研究が一気に進んだのは。その時まだご存命だった建国大学7期生で、東北師範大学日本語科教授を退官された谷学謙先生にお目に

かかることができ、文献や卒業生の手記だけに頼っていた研究を一気に聞き取りインタビューに軸足を移した。また谷学謙先生から紹介された日本でご存命の卒業生、同窓生を訪ね歩き、インタビューを取りためていった。文献とインタビューは車輪の両輪となったのである。

またこの頃総合科学研究科に中国人留学生が多く、大勢の留学生と仲良くなった。なかでも三木直大先生のゼミで満州文学を研究していたO君は特に思い出深い。論文の日本語チェックで明け方まで一緒に過ごし、朝焼けのファミリーレストランで朝食を共にしたことが何度かあった。帰国する時は空港まで見送った。O君は今、故郷瀋陽で日系企業に就職し、美人の奥様と暮らしている。

ところで元中国新聞社社長の今中亘さんは昭和34年文学部の卒業である。今中さんは退職後新聞社の特別顧問などをしておられたが、ひよんなことから私が建国大学研究をしたことを知り、「私は満州、奉天（現、瀋陽）の生まれだ。死ぬ前に一目故郷の瀋陽を見たい。小松君、連れて行ってくれんか？」と連絡をいただいた。私は早速、長春の林嵐先生、瀋陽のO君と連絡をとり、受け入れと案内をお願いし、広島市立大学広島平和研究所の吉川元先生ら4人で中国東北部を旅した。

瀋陽ではO君の父上が車を出してくださり、空港の送迎から街の案内、食事の世話まで一手にやってくださった。今中さんの戸籍簿本から、生まれた街、通った小学校まで特定して下さっており、今中さんは夢がかなったと涙を流された。今中さんは新聞社の社会部長時代、広島の暴力団撲滅キャンペーンをはり、共政会会長と堂々と渡り合った広島マスコミ界のレジェンドである。

このように総合科学研究科は私に勉強だけでなく、素晴らしい友人、経験を与えてくれた。

私は2017年秋、総合科学研究科を修了し修士号を取得した。これで一段落であるが2019年に再び総合科学研究科の門戸を叩いた。今度は文化人類学の長坂格先生のゼミである。長坂先生は私が総合科学部に入学した際、最初の授業を受けた先生でもある。

私には、40年前広島市南区段原から、ハワイ島ヒロの日系人2世男性と結婚した叔母がいる。彼女は植民地朝鮮ソウル生まれ、満州育ち、戦後広島市立第一高等女学校を経て、新制県立皆実高校1期生として卒業、家業の米屋を発展させた。ヒロに行ってから婚家のアンセリウム花卉農業を発展させた。70歳から地元ラジオ局の日本語放

送のキャスターを務めるなど稀有な人生を送っている。私の二度目の修士論文は移民研究、なかでもこの叔母の生活史である。

今総合科学研究科は 2020 年度からは学生募集を停止しており、大学院は人間社会科学研究科に統合され、私は最後の博士課程前期の学生になる。

総合科学部、総合科学研究科は、この私に多くの学ぶ機会を、かけがえのない友人を与えてくれた。オッチャン、オバちゃんにも学びの場を与えてくれたことが、何よりも大きい。学問の場で芽生えた友情は何ものにも替えがたい。心から総合科学部、総合科学研究科に感謝する次第である。

余白で豊かになった総合科学部の4年間

広島大学大学院人間社会科学研究科
博士課程前期 2 年 山本 昌奈実



「このエッセイを読んでくださっているあなたは、自由に使える『余白』の部分で何がしたいですか？」

入学式の日、式終わりに合流した母から、「入学説明会で総合科学概論という授業の小論文の表彰式があった。1年生の最後に授業で小論文を書かないといけないみたい。1年後、あんな風に発表できるような充実した大学生活を送ってくれたら嬉しい。」と言われ、私の総合科学部での学生生活が始まりました。

私は、受験や初めての1人暮らしを支えてくれる母に、総合科学部で楽しく大学生活を頑張っていることを報告したい気持ちで「総合科学へのいざない」や「総合科学概論」という分野の枠組みを越えた深い思考が必要となる、いかにも総科らしい授業にはより一層意気込んで取り組み

ました。高校生のとき、受験時に学ぶ分野を絞らなくても大学生活の中で自分の学びと将来を自由に開拓できるという「余白」があることにとても魅力を感じて、総合科学部を進学先に選びました。ところが入学後は、何でも自由に考えて良いという「余白」の多さに戸惑うことになりました。

しかし、他学部との関わりが生まれやすい東広島キャンパスで、さらに総合科学部という専門分野が異なる友人と共に学ぶ機会が多い環境で過ごしているうちにいつの間にか、自由に使える「余白」の部分を使って異分野へ越境する習慣が身に付いていました。そして、今自分が持っている考えを新しい世界から俯瞰して問い直すこと、そしてそこに新たな要素を加えることの楽しさと大切さを学びました。

卒業式の日、学部長の「総合科学部で学んだラテラルシンキング(物事を多角的に考えること)を卒業後も大切にしてほしい。」という言葉聞いて、正直、卒業式でもまたそのフレーズ?と聞いていました。しかし、卒業後、社会に出て、マニュアル通りだけでは対応しきれないことや例規のどこにもすんなりと当てはまらないことの多さを知り、ふと、卒業式で学部長が4年間聞き慣れたフレーズをもう一度おっしゃった意味が分かった気がしました。そして現在は当時の学部長の研究室で今までの学びをより社会に還元する方法を考えています。

広島大学の理念の1つに「平和を希求する精神」があり、広大生は必ず1度は「平和とは何か?」という問いに思考を巡らせたことがあると思います。私は、「平和とは選択肢の豊かさではないか?」と考えています。衣食住・将来の夢・学び・余暇の過ごし方等、ひとり一人が持つ様々な場面での選択肢の豊かさが平和へと繋がると思っています。そして、ひとり一人の選択肢を豊かにする方法の1つが「余白」を使って「異分野へ越境し、新たな世界を学ぶこと」だと考えています。

2020年度入学の個人談

広島大学大学院人間社会科学研究科
博士課程前期 1 年 牧野 桃子

不運なコロナ世代、私たち 02(2020年度入学)はこう表現されることが少なくありません。新型コロナウイルスの騒動によって、私たちの大学生らしい時間は、2年ほどしかありませんでした。

2023年以降に入学した後輩らの話によると、私たちが2年生、2021年の秋～冬にやっと実現した対面授業やまともな交流・サークル・旅行 etc...を1年のゴールデンウィーク遅くとも夏休みには全てやってのけるようです。

今の大学生と比較すると、私たちの大学生活は別世界のように制限の多い日々でした。特に家に籠るだけだった最初の1年、その中にいたとき、日々を浪費していたように思えました。でも今引きの画角で見ると、小学生くらいから詰め込みで毎日マグロのように泳いできた日々からふと一息つけた時間でもあったように思います。またコロナによって、パッケージ化された日々を過ごす傾向が弱かったことも、私は生きやすかったです。

2021年以降は、オンラインも併用しつつですが学部生活はそれなりに楽しめたと思います。主たる専攻である言語に関する学びや研究活動に加え、平和やダイバーシティ・インクルージョン・ジェンダーに関することなど、必修が少ない総科の利点を活かし、学びたいことを学んだと思います。4年になる春にはインクルーシブ社会構築のテーマで、タイに2週間だけはありますが留学もしました。

このような日々の中では、授業を受けるメンバーが固定されることはないため、個性豊かで価値観も異なる友人に多く出逢うことができました。授業中のディスカッションに加え、余暇の時間に散歩や食、ダンスなどで交流した時間は一生のお守りです。印象的だったことの1つに“文化的に〇〇する”という言葉があります。これは自分の習慣を説明するとき便利な言葉で、踊ることが習慣になかった私は、文化的に踊らないからな～、なんて言っていました。この言葉を口にするようになってから尚更、自分が当たり前とする行動には環境の影響が大きいと感じます。

私の大学生活は、一見無駄に見える家に籠らなければいけない時間が多くありました。オンライン生活が長引いたことへの無念はもちろんありますが、今生きているし、自粛やマスクと共にあった4年間という時間は、私の一部になっています。個人的な経験を踏まえて見つめると、自分で自分を世代一括りにし、不運の一言で片づけられない、濃い4年間だったと思います。

総科での4年間を経て

広島大学大学院人間社会科学研究所
博士課程前期1年 中森 柚子

高校2年生の冬、「早く進路を決めなさい」と担任に迫られて悩んでいました。大学でもっと勉強したいという強い気持ちはあったものの、自分にぴったりの学問がわからないまま一つを選ぶことは、将来の可能性を狭めてしまうように感じて怖かったのです。進路希望調査のために「〇〇学」と名のつく分野を本やインターネットで調べましたが、決めきれないまま日々を過ごしていました。

そのころ、広島大学総合科学部のホームページに出会いました。そこで、総合科学部には自分のやりたいことをゆっくり探る時間があると知りました。様々な学問分野を横断し、「学際的」な研究に開かれている総合科学部は、進路に悩む受験生だった私の目に非常に魅力的に映りました。

晴れて合格し入学したものの、コロナ禍の真っ只中。ぎこちないオンラインの新入生歓迎会やグループワーク、せっかく受かったアルバイトも経営不振で1か月で辞めることになりました。家の周りを散歩する日々、鬱々とした気分が続きました。

そんな霧がかかったような日々の光となったのは、大学の講義でした。広島大学は他大学に先駆けてオンライン体制を整備し、私たちの学びはほとんど制限されませんでした。先生方は慣れない新しい方法でも工夫を凝らして授業を展開してくださいました。初めて、ドキュメンタリーや長編映画をメモを取りながらじっくり観ました。授業で紹介された論文や書籍を読み、心に響いた文章をパソコンのメモ帳に書き写していきました。受験のためではない文章の読解は新鮮でワクワクしたのを覚えています。

別の講義で学んだことと、今読んでいる本の内容が、一見無関係に見えて繋がっていることに気づいたときは、心が躍りました。知識をたっぷり吸収した後、レポートのかたちで表現するのは大変でしたが楽しく感じました。日々の疑問を些細なことと片付けず、問いとして探究し言葉にすることで、ぼやけていた問題の輪郭がはっきりしていく喜びは何にも代えがたいものでした。

通常の対面形式ではありませんでしたが、家に籠もる期間に大学で学ぶことの奥深い面白さに気づくことができました。総合科学概論で書いた

学生服とジェンダーの歴史に関する小論文が優秀賞を、戦争孤児への社会からのまなざしに関する特別研究論文が岡本賞を受賞したとき、「私は学び、調べ、書くことが好きで、これからも続けていく」という予感が強い確信に変わっていくのを感じました。

総合科学部で4年間を過ごす中で、突き詰めたことを発見した私は今、広島大学大学院人間社会科学研究所に進学し、戦争と子どもの歴史について研究しています。文献を読み、史料を発掘したり翻刻したりする時間はとても充実しており、日々研究することの楽しさを噛みしめています。今もちろん、将来への悩みや迷いは尽きませんが、高校生の頃とは違って、自分の好きなことや大切にしたいことを自分自身の手のひらで強く握ることができていると感じています。

改めまして、総合科学部創立50周年おめでとうございます。これからも総合科学部が新たな学びと出会える、ますます豊かな場として発展していくことを願って、私の文章を締めくくりたいと思います。

贅沢な寄り道

広島大学総合科学部総合科学科4年
草野 櫻子

この度は、総合科学部創立50周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。総合科学部は「学際性、総合性、創造性」という理念のもと、既存の学問体系を超えて諸課題の発見・解決に貢献するという大きな目標を掲げていますが、その実、学生生活はどうでしょうか。私が思うに、総合科学部生というのはとにかく自由度が高すぎます。贅沢なことに、必修科目がほぼないうえに取れる講義が多種多様からこそ、その自由さに圧倒されます。

ひとまず、私自身の総合科学部での学びの日々を振り返ってみましょう。私は理系入試で入学し、散々迷った末に専門として言語コミュニケーション授業科目群を選択しました。その後の専門課程では、言語学系の講義で音声分析ソフトをいじったり初めて耳にする言語を書き取ったり、留学生を相手とする英語でのディベートに苦戦したりの毎日でした。もちろん総合科学部生だからこそ専門だけには留まらず、その他の学問へ寄り道に寄り道を重ねました。マイノリティとそれを生

み出す現代社会について学生と議論を交わしたり、あるいは大きく時代を遡って書物の歴史に思いを馳せたり、そうかと思えばプログラミングに手を出したり、とにかく思いのままに学びの領域を広げる学生生活でした。ちなみに、開講される講義が多すぎるがために穴場のような講義も発生していました。私が今までに履修したもので最も受講生が少なかった講義では、広い教室でたった4人が静かに先生の話聞いていました。

では、これだけ自由に講義を選択できるなか、手にしたものは一体何だったのでしょうか。もちろん専門としている言語学の専門性であるともいえますが、私はそれ以上に、自分自身が持つ興味関心の幅広さに対してアイデンティティのようなものが得られたように思っています。先日、語学留学のため台湾を訪れたとき、班のメンバーから「興味関心の幅が広いよね」と一言お言葉をいただきました。入学以降、総合科学部には他学部のような分かりやすい専門性がないと多少の焦りを感じることもありましたが、もうここまで来てしまえば自身の雑食性を自負する気持ちさえ湧いてくるのです。

最後に、4年にわたる目的なき贅沢な寄り道を見守ってくれた総合科学部には感謝の気持ちでいっぱいです。これからも、様々な学問領域の間で迷える学生たちに居場所を与えてくれる、そんな学部であり続けてくれることを願っています。

総合科学部での学び

広島大学総合科学部総合科学科4年
細國 空

物事を考えるときに、点と点が線で繋がり、閃いたり、冴えたアイデアが浮かんだりすると思います。総合科学部での学びは、非常にたくさんの点をさまざまな学問分野に作ることができるものだと思います。点をたくさん持っていれば持っているほど、点と点を結んで、線をたくさん引くことが出来ます。そしてその点がさまざまな学問分野に広く分布していればしているほど、斬新なアイデアを思いつくことができるのではないかと思います。

少し抽象的な話になったので、私について具体的な話をしたいと思います。私は人間文化授業科目群に進み、美学や芸術学を専門に勉強しています。芸術の中でも特に現代美術に興味があり、現

在取り組んでいる卒業論文でも、現代のアーティストについて書いているところです。現代アートというのは、近代までの美術とかなり毛色の異なるものです。なぜかという、近代までの美術が純粋に美的価値、つまり作品の美しさを追究してきたのに対して、現代では、作品の美的価値が求められるだけではなく、作品の背後に作者が自身の思想や社会的・政治的なメッセージを込めることがほとんどだからです。そうした現代の作品について考えるには、美術についての知識があるだけでは、なかなか作品の本質に近づくことは出来ません。歴史についての知識があることはもちろん、今世界ではどのようなことが問題になっているのかを知る必要がありました。私は総合科学部でジェンダー関係の授業、マイノリティー論、科学史の授業、倫理学、心理学、文化人類学などなど、本当に様々な授業を受けました。どれも芸術学と直接の関係性は見えないものですが、こうしたさまざまな分野に点を作ったことによって、現代アート作品について考える際の基盤ができたと思っています。私は来年度から大学院に進学する予定です。総合科学部での学びを大学院での研究でも活かしていきたいと思っています。

人類の夢に挑めるように

広島大学総合科学部総合科学科3年
松元 祐希恵

既存の枠組みにとらわれることなく、学びたいことを貪欲に学べる。自分の興味に正直でいられる。総科だから、物理学の面白さに気付けた。総科だから、自分が好きだと思える学問に出会えた。総合科学部での学びの中で、私は日々、学ぶ幸せを感じ、学問を愛せる喜びを感じている。

2年生から物性科学授業科目群に所属し、物理学を中心に学びながら、プログラミングや中国語、環境問題、天文学、心理学、文学、そして平和について学んできた。そんな自由な学びが許された環境だからこそ書くことができたのが、総合科学概論での小論「タイムマシンの作り方」である。

「タイムマシンの作り方」では、過去の天才たちの頭脳を借りて、主に相対性理論をヒントに時間を操る方法を考えた。この小論を書く上で最も驚いたのが、タイムマシンの実現にあたって解決すべき問題量の多さである。時空を操るための理論的な問題だけでなく、マシンの素材、搭乗員の

安全を守る装備、エネルギーの収集・貯蔵方法やそれに適した土地、過去改変に対する倫理的・哲学的問題、さらにはタイムマシンの利用に伴う新たな法律の整備等、文理の壁を超えた数多の学問が複雑に作用し合っている状況の難しさを実感した。あっと驚くような挑戦には、幅広い知識と多角的な視点、それによって得られる創造性が必要不可欠なのではないかと思う。

将来は、総合科学部で培った学際性や創造性を生かして、人類の夢に挑むような研究に携わりたいと考えている。そのために、今後もひた向きに貪欲に、この総合科学部で勉学に励みたい。

自由な学びに信念を

広島大学総合科学部総合科学科3年
前平 紬希

この度は、創立50周年おめでとうございます。私自身を表現する機会を頂き、とても嬉しく思います。

総科に入る前から、私は様々な分野に興味がありました。逆に「自分が一番やりたいこと」を決め切れずにいて、ふわふわと過ごしていました。より広く、深く学べる場所で、自分にとっての「一番」を見つけたい。そう思い、総科で学ぶことを決めました。

コースを決めた後もなかなか自分の本心が見えてこず、不安もあった中、「総合科学概論」での短い研究期間を経験しました。「総合科学概論」では、自身の関心について自由に取り組むことができます。私は、「かわいい」という感情をテーマにしました。見ているだけで幸せになれる「かわいい」がどんな特徴を持っているのか知りたい、というごく単純な興味がきっかけです。当時の私はあまりに未熟で、「研究」と呼んでいいのかわかりませんが、この研究に取り組んでいる際、関心に真っ直ぐ向き合うことの面白さと、これまでと違う、自分の中にある熱に気づきました。この時、自分の「願い」に立ち帰ることができました。

私の「願い」は、コロナ禍において生まれました。自分の手の届かない場所で命を絶ってしまう人がいることを、より身近に感じたことがきっかけでした。遠くにいる人の心の声を直接聞くことは不可能かもしれないけれど、心を軽くしうる環境づくりがしたい。目に映るだけで、ポジティブな感情を生み出すものを作りたい。この「願い」

は総合科学概論での研究を展開すれば叶えられるのではないか。ぼんやりとしていた「願い」が、学ぶ上での「信念」に変わりました。

信念が輪郭を持つと、自分が一番やりたいことが見えてきました。今は視覚心理学の観点から、「かわいい」などのプラス感情の喚起について研究したいと思っています。見るだけで心を和ませてくれるもの自体は既に多くありますが、どの要素がそうさせるのかについては、まだ追究の余地があると考えています。いつか、私が研究した要素を持つものが遠くの人にも届き、その人の心を軽くすることができればと思います。

私は現在、これからどんな風に生きていきたいかを明確にすることができていません。しかし、総科での学びと同様、今後も、やってみたいと思えたことに進んで取り組んでいこうと思います。挑戦して、やっと見えてくることもあると体感したからです。自分が進んだ先で信念を形にできるよう、残りの大学生活でも、目一杯学びを楽しみたいです。

総科で見つけた自分の道

広島大学総合科学部総合科学科2年
奥田 弥陽乃

「総科って何してるの」――総科に入学して何度も質問されましたが、これに答える時必ず「私の場合は」で始まります。それくらい総科は皆が同じ場所に所属しながら異なることを追い求めているような不思議な場所です。さらに困ったのは「君の専攻は何」という質問です。大学生になり学問の世界に飛び込んだかと思っていたのに、専攻がはっきり答えられないことに少し疑問を感じたこともありました。そんな私が総合科学部で約1年半を過ごし、現在は自身のことを国際政治を専攻にしていると自己紹介しています。きっかけは2023年11月に参加した広島県主催の「G7広島サミットレガシープロジェクト」にて確信した国際政治への関心と「総合科学へのいざない」にて出会った中東政治・国際政治学を専門とする先生でした。「総合科学へのいざない」の最後に提出した小論文“Different Points of Views Toward Nuclear Weapons Between Hiroshima and the Japanese Government”は私の大学入学後の総合科学部で、そして広島での経験と学びの集大成といえますし、これからの大学での学びの展望にな

ったことは明らかです。総科の授業には全く興味のない分野の先生のお話を聞かなければならない時もありますが、その中で自分の関心と学問分野がピッタリ繋がった私からすれば、そのような機会はすごく意味のあるものだったと感じています。こんなにも異なる関心を持った人が集まる刺激的な場所はまたとないと思っています。ふとした人との出会い、そして総科という共通点だけで私自身も知らない新しい世界に飛び込むことができる、そんな多くの出会いと挑戦が溢れる場所です。有意義な大学生活を送れることを嬉しく思っています！

総合科学部 50 周年を迎えて

広島大学総合科学部総合科学科2年
平原 和哉

総合科学部 50 周年おめでとうございます。同学部の一員として、50年に渡り総科が愛され続け歴史を紡いでいることに格別な誇りと喜びを感じています。

私は入学時に決めた「広大で様々な経験をして広大な視野を持ち、自らの可能性を大きく広げる」という目標を元に、総合科学部の先生方、職員の方々のご支援やご助言、家族の協力、個性豊かな友との協働的な学びを通して、日々挑戦心を燃やしています。興味関心の幅が広い私にとって、総合科学部の特徴である文理や学部の域を超えた多分野の学びを楽しみ、思考を深め、様々な課外活動にも取り組むことができています。私自身、専攻である地域研究コースに関わる歴史の授業を中心に、一年次は数学や工学、二年次は外国語や海外留学、教職課程などにも挑戦し、新しい興味関心が日を重ねるごとに増えています。

総合科学部として、他学部からの「総科は何をしているところなのか？」という質問は避けがたいアイデンティティを揺るがしてくる恐怖の質問ではないでしょうか。総科生の間でも度々話題に上がるこの質問は「色々している」という回答にまとまった話し合い以外ほとんど見たことがありません。「総合科学は学問なのか」という問いを05 総科生全員で討論した授業もありました。専門性を持った他学部の意見や学びを幅広い視点を持ってバックアップしたり、ニッチな未開拓分野に足を踏み入れたり、新しい発想を探究したり、興味を持った分野を専門的に研究したり、自

由度の高さや研究分野の幅広さに加えて専門性も担保されている部分は、他の専門学部や教養学部とも異なった総科の強みであり魅力だと思います。個性あふれる総科生は「総科」というまとまりでは定義づけが難しいかもしれません。しかし、それぞれの個性が光る総科が私は大好きで、そのカオスな学部だからこそ私は学びが楽しく毎日が充実しているのだと確信しています。

私の果てしない好奇心と燃え続ける挑戦心・探究心を「せかいにひとつ」のものにするために、学ぶことができる環境と、出会う方々への感謝を忘れず、多くの方と話し、様々なものを実際に見て、聞いて、経験を積み、総合科学部での学びをこれからより一層深めていきたいと思っています。

最後に、総合科学部のこれからのますますの発展をお祈り申し上げます。

「総科は何をすところ？」

広島大学総合科学部総合科学科2年
廉 明德

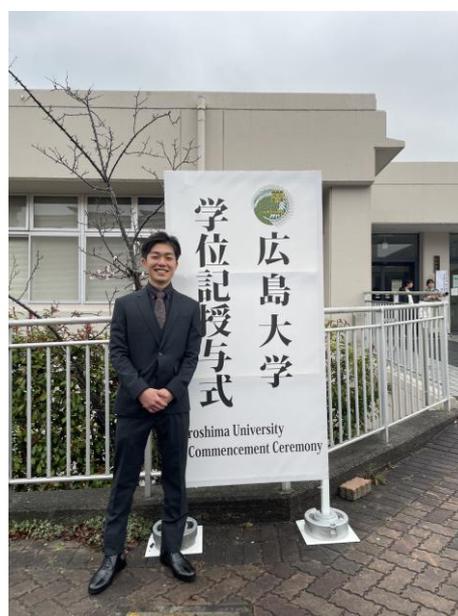
総科に入学してはや1年半が経ち、このたび光栄なことに総合科学概論の受賞者として本記念誌への寄稿をお声がけいただいた。私はあまり顔が広い方ではないものの、総科生として過ごしたこの1年半の間、他学部の方と交流する度に必ずと言っていいほどこう聞かれた。「総科は何をすところ？」と。はじめは毎度答えに窮していたが、(未だに答えらしいものを出せてはいないものの)2年次になってようやく、一つの考え方を持てるようになったと思う。総合科学とはそれ自体が一つの学問体系ではなく、様々な分野を繋ぐような個々に委ねられた考え方である、と捉えられるようになったのは「総合科学へのいざない」を経てだった。すなわち、総科生はなにか形あるものとしての総合科学を学ぶのではなく、むしろ枠に捕らわれない自由な学びや経験を通して、自分なりの総合科学を醸成していくものではないだろうか。それから大学生活の中で色々なことを考え、以来、前述の質問には「特に決まっているわけではなく、みんな色々。私のことなら総科でこんなことをしている」というふうに答えている。ところで、自然探究領域に所属している私にとって、令和6年度より始まったサイエンス研究評価型入試は大変印象的なものだった。さらに多様な志ある学生が総科に集まり、専門性を深めながら

も、分野を超えて切磋琢磨できる機会に恵まれることを、在籍する一学生として嬉しく思う。

今年で50周年を迎える総合科学部。玄関の碑に刻まれた「ひろだいそうかはせかいにひとつ」という言葉の通り、ユニークで学際的な教育・研究が今後も世界に羽ばたいていくことを期待しつつ、私自身も総科生のひとりとして、将来の自分に誇れるようなまさにせかいにひとつの学びや経験、ビジョンを持って、いつか総科を巣立ちたいと思う。

Unexpected Paths: The Opportunities I Found Studying in Japan

2024 Graduate of Hiroshima University's
Department of Integrated Global Studies
Haruya Eda



Going to college in Japan was one of the best decisions I ever made. Some of the most unexpected things in my life happened when I attended Hiroshima University. I became more familiar with the Japanese side of my cultural identity, which led to a significant improvement in my Japanese skills compared to before I came to Japan. I've met many friends, teachers and staff through the IGS department, and I can't thank them enough for helping me through college. One of my proudest achievements was delivering a speech in front of Prime Minister Kishida at the 2023 G7 Summit. The person I was back in high

school—who mindlessly went to school every day on a small island for 18 years—could never have imagined what he could achieve by going to college.

At first, I thought that my college life was going to be a challenge. Speaking in my second language wasn't as easy as I expected. I always spoke Japanese with my parents at home, but I hadn't realized how much my Japanese lagged compared to people my age, and it didn't help that my appearance fit the part. Looking back now though, I think choosing IGS was the best thing for my situation. People from across the world and with unique backgrounds were in our department, which made people more understanding with me. Without the pressure to conform, I was able to learn and become more familiar with the language and culture at my own pace.

Whenever I think about the 2023 G7 Summit Student Volunteer program, I'm always just so glad that I applied for it. At the time, I had applied for the Student Translation Volunteer Group. I was of course excited to be a part of such an important event, but I never imagined that a decision made on a whim would lead to such a significant role. During the volunteer events that led up to the 2023 G7 in May, I was only focused on how I can contribute. I was met with executives from many different countries, and at times I felt unsure of whether my own skills were up to the standards required for the event. However, I was also thrilled to be a part of this history. Nervous yet excited, I stayed confident and did my best as a student Volunteer during my short time. Soon enough, I was notified they wanted me to deliver a speech to Prime Minister Kishida as a representative for the student volunteers.

I later realized that I was given these opportunities because I was a student. And I do not mean just about the G7, but I mean for all the things I was able to accomplish during college. For me, it was meeting people and making friends in Japan, and improving my Japanese to a level I never imagined I could. One of my best life decisions was to go to college, and although it was only 4 years of my life, the things I've learned and experienced there will stay with me for the rest of my life.

SHIKATAGAARU

A 3rd-year student at Hiroshima University's
Department of Integrated Global Studies
Ryunosuke Nakamura



(Left) Author (Right) My Iranian friend

I was somewhere around one of the most dangerous countries in Southeast Asia, suffering from a hangover thanks to the welcoming party held for me by Japanese people living there. Suddenly, a ridiculously off-axis fan on the ceiling reminded me to write this essay. I was panicked, why me... I kept thinking while staring at the fan. After a while, I have picked the topic which is that the most important lesson I have learned in this department, Integrated Global Studies, and one of the issues I have been keeping in my head. IGS (Integrated Global Studies) is where I truly understood what “SHIKATAGANAI” is and started using “SHiKATAGAARU”, and I would love to share it here but first let me introduce myself. My name is Ryunosuke NAKAMURA, and I was born and raised in Myanmar where I am writing this essay. My father is Japanese, and my mother is Burmese. I came to Japan when I was 16 after graduating from junior high school at Yangon Japanese School to get a higher education.

I remember reading something like “IGS is family” on the pamphlet I got on the first day of the university orientation. I was panicked. After three years of attending an ordinary Japanese public high school to be Japanese, I was surrounded by American, Iranian, Filipino, Bangladeshi, Chinese, and Japanese, and everything was English. All the efforts I was making to be normal were denied and they appreciated my characteristics. 3 years of

Japanization was not enough to make me comfortable with the Japanese custom and I've often felt uncomfortable which makes this department very comfortable for me. I had fun for the first few weeks, but after a while, it was a tragedy or should I call it continuous SHIKATAGANAI. "SHIKATAGANAI" has been used to describe the ability of the Japanese people to maintain dignity in the face of an unavoidable tragedy or injustice, particularly when the circumstances are beyond their control, somewhat similar to "it is what it is" or "It cannot be helped" in English. Especially, our friend group: Iranian, American, and Kyotonian faced a lot of difficulties both academically and socially. Academically, we all took 26 credits, which is the maximum number, which made us suffer in a lot of cases. The only thing that really worried me back then was to graduate. But soon catching up to all the classes was knocking down almost all of us. Socially, since our first year was during the COVID-19 pandemic, it was difficult for us to make new friends and meet new people. Especially our seniors were not there for many reasons. Personally, a lot of changes made me suffer from differences and disagreements in friendships with old Japanese friends from high school. Each time, when we met these difficulties in the first year, we simply said the phrase "SHIKATAGANAI" and avoided it. After I spent my first half year of university life, I was tired. For the New Year event, me and my Iranian friend went to see the first sunrise in Ryo mountain. "Man, this is the way to travel," said my friend. He stood for a while to turn the volume up on his phone, humming along with the rhythm section and kind of moaning the words: "It's really cold, we need some music, it is so cold." Cold? You poor fool! Wait until your toes start to freeze. I could barely hear the music... while waiting for the sunrise, we had a conversation about how our first half year of university went. We have noticed that we or it might be only I, use the word "SHIKATAGANAI" too much. Right after that conversation, when the sun started to rise, we cheered with Amazake for the word "SHIKATAGAARU" and promised to make our year "SHIKATAGAARU" year.

Here, I understand how this word doesn't exist,

and the grammatically correct term will be "SHIKATAGANAKUNAI" but you do not understand how this magical word saved our second year. The word "SHIKATAGAARU" is not just a word, but it is an idea or mentality not to blame the environment and keep trying to improve ourselves. From that very day, somehow our life has improved. Our academic path started to be clear and went well, new great people started to randomly pop up, and old friends kept being great friends. We are not sure why these things happened, but every time we faced challenges or difficulties, we just said "SHIKATAGAARU" and started to fix ourselves. It was impossible to learn this mentality and make the Japanese culture internationalized without our beloved IGS members. I will always keep this "SHIKATAGAARU" mentality and idea in my mind and in my heart and face every challenge. "Was the phrase on that pamphlet true?" my cousin who is 7 years old helped me shape this essay asked. I laughed. Now, I feel like a student who was surrounding me on that day. "Yes. IGS is family" I said.